

The Danube Quarterly

ドナウ通信



創刊15周年記念号

2004(平成16)年・夏季号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin

目次

第一部 人生を変えたハンガリー

初個展までの道程

香西 景子

1

過去と未来を償い終わりぬ

糸見 偲

2

第二部 生活の風景

一九六〇年代のハンガリーと日本

川合 智司

9

小さな喜び

加茂 博行

16

ルート 33

小池 俊明

18

魚買い出しアドリア海の旅

石崎 茂則

21

どっかに行きたい症候群

岩井 孝博

23

その時私は天使に出会った

竹内 勝則

25

日本人の「忘れ物」

村松 佳奈

27

ハンガリーに来てよかった？

林 健介

29

第三部 郷愁の中欧、そしてハンガリー

中欧散文

稲川 照芳

31

八年振りのブダペスト

瀬川 智恵子

39

第四部 ハンガリーで見つけた私の挑戦

長距離走が教えてくれたこと

浅野 未希

43

大勝負

栗田 晃孝

46

四二年振りの一二キロ走

盛田 常夫

48

初個展までの道程

ハンガリーが私に与えてくれた物

香西 景子

三年半前、ここでの生活が始まった当初は、本当に大変だった。一週間、十日と過ぎるにつれて、好奇心は殺々現実にかき消され、暗い気分が襲ってきた。家具の少ないガラランとした広い部屋の壁に、押し潰される様な不安感。初めてのお産を経てもまだ二ヶ月の不安定な精神状態の上に慣れない生活。気もそぞろに、乳呑児を言葉の通じないベビーシッターにあずけ、気晴らしに外出すれば毎度のように、右も左も言葉も分からない外国人に対する冷たさに会う。シヨッピングの楽しさどころか、実際にダメージを受けてヘトヘトになって帰って来たものだ。今ほど店や行く所も多くはなく、まだ友人も少な

く、こうして落ち込む私も例にもれず、「カルチャーショック症候群」だった。ベビーの会に参加して閉じこもらないように努めたり、ハンガリー語を習い始めたりと色々やってみた。それでもいったい自分は何がしたいのか、どうしたいのか分からなくなる。そしてこれからずっと先、年老いてから何をしているのだろうか、と、先の事まで考えてしまい、今以上の不安が一瞬よぎった。そんな時、子供は本当に救いになってくれた。ずっと顔を見ていると、今この時の姿を留めておきたいという切なさにかられる。写真を沢山撮ってみるが、何か物足りない。「そうだ、絵に描いておこう」などと思い立つ。が、子供は動き、全くじつとしていない。十枚、二十枚とデッサンしてみるが旨く行かない。

居た時よりもっと身近に文化、芸術に触れる機会が多くなり、刺激を受ける事しばしばである。再び奮起、何枚目かのデッサンで、もうすでに一才半になっていた息子の顔がやっと完成。周りはもう夏景色。素朴な矢草の薄紫色があたり一面に美しく、本当に絵を描きたくなった。取り付かれた様に油の画材を買ってきて、一心に描いた。何だか分からないけど描いた。これはいいよ！本格的に勉強したくなってきた。誰か先生に就こうか。けれどずっと以前勉強していた時の事を思い出すと決心なかなか成らず、焦る。もし自分に全く合わない教え方だった場合、逆効果なのは経験済みだ。しかしとうとう知人に、女流画家の先生を紹介してもらい、思い切って訪ねる事にした。十一区に行ったことのない場所へ、地図を頼りに車を走らせる。やっと着いてオズオズとベルを鳴らすと、想像とは遠い明るいチャーム

ングな女性が出迎えてくれた。先生の名前は、セーブファルヴィ・アグネス。聞いていた通り英語も堪能で、ホッと安心する。アトリエに通され、ひととおり作品を見せてもらった。彼女の作品は主に女性をモチーフにしている。初対面ですっかり意気投合して、御教授願う事になった。その時一言、もし私に少しでも素質があるなら、只の趣味としてではなく真剣に描いて行ける様、教えてほしいと頼んだ。



これからが楽しく厳しい戦いの始まりだ。約二十年ぶりにデッサンの勉強の為にとる鉛筆。学校時代に美術大受験と肩を並べて、美術研究所で石膏デッサンの勉強をした事が頭に蘇る。辛くて、つまらなくて、絵を見るのさえ疎ましくなるほど嫌いにさせられた。とうとう美大も受験せず他の学科に進んだ。そして今、目の前のモチーフを前にすっかり腕が固まってしまった。どうにも堅い。デッサンは絵を描く上の腕慣らしだ。スポーツの練習の様なものといえる。いかに勢い自由に自然に、そして巧みに描ける様になるか。緻密に描くという事でもない。なんとか昔やったアカデミックな石膏デッサンの堅さから脱出しなくてはならない。来る日も来る日もデッサンが続く。レッスンでも家でも、並行して、ペンや水彩でのクロッキーを何枚も何枚も描く。その他にも色々な勉強法を試みた。その間、先生は実に根気良

く忍耐強く、そして決して自分のスタイルを無理に押し付けたりせず、私の個性を尊重しながら指導してくれた。ここまで考えてくれるのかと、感心するほどありとあらゆる課題や勉強法を与えてくれる。とても手間は短かかっている事ばかりで、それは短い間に凝縮された大学のカリキュラム並みだ。お陰で腕も大分柔らかくなった。

そして半年以上が過ぎ、やっと油絵のレッスンが始まる。自己流では描いていたけれど、いざ始めてみると慣れない絵の具との葛藤だ。家でも描いて描いて、夜寝る前にもキャンヴァスの前に立った。寝巻のまま筆を持って二時、三時になることもしばしば。好きな画集を開いては、昼も夜もにらめっこ。宛ら教科書である。そして最終的にヌードデッサンが始まった。一度は勉強しておくのも大事と言われるヌード。個人でモデルを雇って勉強するのは大変な

事だが、先生がわざわざモデルを探してくれて、それも叶う事になった。それは静物やら他の物を描くのととは全く違う何かを与えてくれた。とても強い緊張が続き、段々ほぐれて来ると、腕が伸び伸びと自由になって、頭の後ろの遙か向こうから来る力が描いている様な、そして水中で自由に体を動かしているような気分だ。しかし、ここまでの心地よい緊張は、かなりのストレスにもなつて、少々体調に響くほどだった。

一年が過ぎ、ここで勉強出来るのもあと一年。九十九年は帰国予定だ。そこで日本に帰ってからもずっと続けて行く支えと、自信を持つ為にもここに居る間、一度個展を開いてみたいと、恐る恐る言ってみた。ハンガリーは日本以上に経歴を問うところがあり、ビギナーや無名の、しかも外国人に最初から場所を提供してくれる所は、なかなか無い。それでも先生は快く承知してくれた。まず

は作品の見本帳を作つて、何軒も何軒もあたつてみる。彼女は、自分の事のように一生懸命探してくれた。数ヶ月後やっと二・三ヶ所、作品を見てもらいOKしてもらったが、こちらの希望の時期に空いている所も限られ、夏の間も人が居ないのでこの話は中断。やはり少々無理だったのかと、ほとんど諦めていた。残念だが半面、その大変さを思うと少々ホッとしたのも正直なところだ。しかし、九月も半ばになって再び場所が見つかったとの知らせ。とっても嬉しく飛び上がる思いだったけれど、ドキドキの緊張も訪れた。あわてて招待状の手配、招待する人のリストアップ。日時は十月三日。もう十日ほどしかない。作品整理や、場所の下見、あれこれ忙しい。日本からも絵を描いている叔母が応援に来てくれた。招待状を投函すると、緊張と不安はピークに登り、当日の事が心配で落着かない。もしかしたら誰も

来てくれないのではないかしら。自分の作品なんか人に招待するなんて厚かましいかな、などなど。大それた事やっちゃったなという思いでハラハラ。



いよいよ十月三日土曜日。朝から先生夫妻に手伝ってもらったの会場準備。招待状手配、会場と全てがこれから先の為の勉強と、ポイントを一つ一つ指導してもらった。オープニングは夕方六時。待ち遠しくも恐ろしく。六時少し前より来客の姿がチラホラ。来る人来る人にお礼の挨拶をして、六時には想像を越えてとても多くの人々が集まってくれた。

日本人も、ハンガリー人も一同に暖かく見守る様に囲んでくれている中、先生によるオープニングスピーチが始まり、もう体はコチコチで頭の中は真白だ。そしてスピーチが終わると、急にここまでの道程が思い出され、感無量。思わず先生と抱き合い、不覚にも目から大粒の涙がポロポロこぼれ、止まらなくなつてその場で俯いてしまった。

そんな私に一人一人が、日本語で、ハンガリー語で声をかけ励ましてくれた。その温かさ優しさは、どれほ

ど力強く支えになった事か。いろいろな人と話し、評をもらって、この個展は私にとっては大成功だった。終わってみてホッとすると同時に、もう後には引き返せないという思いと、老いてまでやって行けるものを見つけた幸福感、自分がやっと見つかったという思いでいっぱいだった。日本に居て生温かい生活の中では何も思い付かず、私の人生は何も変わらず、ずっと何かを探していたかもしれない。日本には何でもあつて、お金を出せばカルチャースクール、専門学校、ヨーロッパ美術学校受講ツアーなど。でも今時、誰が只の主婦の私をここまで一生懸命育ててくれるのか。大袈裟かもしれないけれど、ハンガリーに来た事、今となつては運命的な物さを感じている。そして、素晴らしい先生にめぐり逢えて、嫌いになりかけた絵を再び無くてはならないものにしてくれた事への感謝の気持ちで一杯だ。この

後々、どこかの国に暮らす機会があるだろうが、ハンガリーへの思いは特別に一生大切に仕舞っておきたいと思う。

『ドナウ通信』No.38 所収（一九九九年新春号）。



過去と未来を償い終わりぬ

糸見 偲

十年一昔というけれど、三昔、四昔という云い方はあるのだろうか。兎も角、私とハンガリーとの付き合いは、小さな数字では云えないほど古くから始まっている。まさか、こんなに長く一つの国に執着するとは思ってもみなかった。

熱し易く冷め易い私の性格を知っている家族や友人たちは、一年も経たぬ内にハンガリー熱は治まって帰って来ると思っていたらしいが、とうとう三十年以上も過ごしてしまった。そして、いつの間にか人生の半分以上を異国で過ごし、そこを「私の家」と呼ぶようになった。私の心をこんなにも強く縛りつけたハンガリーと云う国は一体何なんだろうと、最近、この事を良く思う。

一九六四年、私は生まれて初めて

ハンガリーの地を踏んだ。何の予備知識も無く、かろうじてリストの名前と五六年のブダペスト動乱の事件が少しだけ頭の中にあっただけ。はなやかなパリの生活に慣れていた私にはブダペストの町は暗く貧しく、心寒かった。

当時、私は映画ペンクラブの会員として、フリーで雑誌や新聞に映画評論やスターの話題などを書いていた。女性の映画評論家は数少なかったが、殆どが英語圏のフィルム専攻で、私はただ一人のフランス映画派の様だった気がする。六〇年代は日本経済も少しずつ安定してきて、市民の生活にもゆとりができ、娯楽として映画がもて囃されていた。二本立て、三本立てで上演されて、映画は作っても作っても人が入った。日本映画のみならず、外国映画も同時に最盛期を迎えていた。はなやかなスター達が日本を訪れ、その都度、日本中が沸いた。私もフランスのス

ター達に出会い、インタビュを通して友情の輪が広がった。

たくさんさんの知人のなかで、特に影響を受けた人が一人いる。フランソワ・トリュフォー監督である。新しい波（ヌベル・ヴァーグ）の旗手、フランスのアカデミックな映画界にシャブロールやゴダール達と共に一石を投じて新しい波を起こした活動家。カンヌ映画祭にバリケードを作って、映画祭を粉砕した事はある。

元来、映画は小説が有って、それを脚本家がシナリオに直し、監督が映画にすると思っていたが、原作、シナリオ、監督を全て一人ですると云う事を聞いて驚いた。時にはプロデューサーも兼ねて、安い制作費で自分の考えを映画にすると云うやり方は新鮮だった。今でこそ、映画はお金さえ集めれば誰でも簡単に作れるようになったが、昔は映画監督になるには徒弟制度みたいなものがある

って、なかなか一人立ちではできなかった。色んな部門に大御所的な存在が居て、自分の思うようには進めなかった。そんな古めかしい主義を打破したのが、トリュフォー達だったのである。

彼から色んな事を教わった。映画に対する姿勢。映画は民衆のただの娯楽の一つと想っていた私に映画で社会を変える事ができる、国をも変えることが出来ると教わった。そしてこの考えが後に現在の夫に会わせ、私の人生を大きく左右して行ったのである。

ハンガリー行きはトリュフォーに云われて、実現した。「東欧の映画は面白いよ。チェコ、ハンガリーの映画を見てごらん」と彼は云った。ハンガリーの最初の印象は余りに見すばらしく、もの悲しく、たいへんな所へ来てしまったと云うのが本音だった。遠来の客である私を精いっぱいもてなしてくれる人達の親切が、

かえって億劫な位、私は西欧カブレしていた様だ。今振り返ってその当時の事を思うと、穴があったら入りたい位、恥ずかしい心境になる。

ロイヤル・ホテルと云う外国人専用のホテルが一つだけあって、フンガロフィルムの特設ゲストとして、そこに三日間逗留した。三日の間、色んな映画を見せてもらった。殆どの映画がモノクロで、ヒューマニズムと四つに組んだものが多かった。一日中、たくさんのフィルムを見て、ふらふらの頭でホテルの部屋に帰る。なかなか寝つかれないのでラジオを付けてみる。今まで聞いた事もない言葉が出て来る。何を云っているのだろうと必死に聞くが、一つも判る言葉がない。ラジオを切った。しかし、道路からの音も、廊下を渡る人の足音も何もしない。静まり返った部屋は却って不気味で、人寂しさの余り、またラジオを付けた。ひと声、ふた声、喋りがあって、もの悲しい

メロディーが流れて来た。そして、だんだんドラマティックになっていった。私の耳を刺激した。ハツと思つた時、曲は終わってラジオもプツンと途切れた。それからはブーと云う電波の音が流れてくるだけ。その夜は妙に息苦しくて、暫く寝つかれなかったのを覚えている。一九六四年のまだ肌寒い春のことであつた。

そして半年後、私は東京の国立競技場にいた。そこでまたあのメロディーと出会った。東京オリンピックのサッカーで、見事、ハンガリーは優勝し、この曲が流れ、私はそれがハンガリーの国歌と知った。

仲良くなったバスケットボールの選手達を家に招待した時、ハンガリーの国家を歌ってくれるように頼んだ。その時、彼らは直立しないと歌えないと云ったので、舞台でも作ろうかと私は笑った。歌い終わった時、彼等はみんな泣いていた。私も云うに云われぬ不思議な感情の高ぶりを

覚えた。

神よ悦びと富を持って

マジヤール人を祝福し給え

………

不幸に迫はるこの民に

喜びの年を与え給え

………

もはやこの民は過去と未来を

償い終わりぬ

未来まで償い終わったと云うのはどう云うことなのか。どんな不幸を背負って来た民と云うのだろうか。考えれば考える程に、私は一步一步ハンガリーに填っていった。

ハンガリー映画は率先して見る様になり、ハンガリーの歴史に興味を持った。六七年、カンヌ映画祭で最優秀監督賞を受けた監督とインタビュウがきっかけで知り合い、七二年十一月、彼と結婚した。結婚を決めるまでに長い時間が掛

かった。生まれも育ちも違えば、国の体制も違う。言葉も文化も全て異なる二人が共に暮らす事は不可能と云っても良い。犠牲を払うのは私の方が大きいと知っているから、彼は決して無理を云わなかったし、私は私で仕事があるからそれが一段落するまでは一年に一度の逢瀬だった。

フランスの女性誌「エル」の記者もしていたから、一年に一度、私はパリと東京を往復していた。そして、その帰路、必ずブダペストに立ち寄っていた。ブダペスト滞在は三〇日間。旅行者の場合、それ以上は決して滞在許可が下りなかった。

知り合えば知る程、彼の純朴さ、知識の深さ、映画に対する情熱に惹かれて行った。大阪万博の年、彼は日本を訪ねた。しかし、仕事で忙しくしている私は、彼の面倒は両親に頼んだまま。この事が余程寂しかったのか、彼の最初の日本の印象は余り良くない様だった。

翌七一年、私の永年の夢であったフランスの女性誌「エル」が「アン」と云う名前で創刊された。それまで大型の女性雑誌は無かったので、大きな話題を喚んだ。順調なすべり出しを見極めると、私はやっとブダペストに来る事を決心した。

アカデミー哲学研究所の留学許可をもらって一年間のブダペスト滞りが決まった。何もかも捨てて、学生として鉄のカーテンの彼方へ行くと云うことで、皆んな驚いていた。学生生活は楽しかった、皆貧しかったから、私は自分を着飾る物をいっさい引き出しにしまい込み、貧乏学生風を装ったのも楽しい思い出だ。

七二年七月、突然、父が亡くなった。今と違ってあの頃は飛行機代がとて高く、急なことでお金が足りない。思い余って大使館に行って事情を話し、大使館のギャランティをもらって航空券を入手し、やっとの事で葬式に間に合った。あの時、私

を信じてギャランティを出して下さった今は亡き上田大使の恩は忘れな

い。

葬式が終わってもしばらくはブダペストに戻らず、母の許にいた。母と話をしていて、父が彼の事を気に入っていたのを思い出した。「素晴らしい青年だから、まじめに付き合うなら良いが、そうじゃないと彼に酷だよ」と云っていた。ひよっとすると、あれは遺言だったのかと思つた瞬間、彼との結婚を決めた。何も考えず、誰の意見も聞かず、強引に結婚への道へ突っ走った。葬式の直後に結婚なんて不謹慎と云われたが、そんな事にお構いなしの私だった。立ち会い人には上田大使夫妻になつて戴いた。今から思えば、随分大胆な事をしたと思う。

結婚しても花の新婚生活と云うわけにはいかなかった。夫の作品は毎度のごとく、その台詞をカット、その場面は無しと政治局からの干渉が

入り、スムーズに映画を作ることが出来なかった。やっと完成しても、いつ公開出来るのか、ひどい時には四年も五年も陽の目が見られない作品があった。

反体制という烙印を押されて何度も悲しい思いをした。しかしその都度、きつと我々の時代が来る、表現の自由が来ると信じて頑張った。

最近、時々、テレビで夫の古い作品が上映される。しかし、それを見ても、時代遅れの作品が常に真実を直視はきつと彼の作品が常に真実を直視しているからではないかと思う。

その後、映画一筋だった夫は八九年に政治に新しい波を起こすべく政界に入った。「もう一人の他人（ひと）」（A másik ember、八八年公開）と云うブダペストの動乱をテーマにした夫の最後の作品が人々の意識改革をし、血を流さずにして共産主義を崩壊させた。八八年から八九年は私達夫婦にとって激動の一年だった。

権力に立ち向かうにあたって夫が真っ先に考えていた事は二度と五六年を繰り返さないと云うことであつた。

彼はブダペストの動乱の年に高校生で、沢山の友達を亡くしていた。その史実を基にして作つたのが「もう一人の他人（ひと）」なのである。

彼と行動を共にしている間、「映画はただの娯楽にあらず」と云つたトリュフォー監督の言葉を思い出していた。もしあの時、ホテルの小さな部屋でハンガリーの国歌を聞かなかつたら、私は今、何処に居るのだろうか。ふと耳に留めたあの曲が、私の心をゆさぶり続けるかぎり、きつと私は静かに年老いていかなうと思

『ドナウ通信創刊十周年記念号』所収
『二〇〇〇年度ベストエッセイ集』（文藝春秋社）所収

一九六〇年代の ハンガリーと日本

川合 智司

私は、戦後初代の外務省留学生として、六〇年八月から六四年三月まで、次いで大使館書記官として七七年一二月から八一年七月まで、二回にわたり都合七年二ヶ月の間ハンガリーに勤務し、本年三月に外務省を退官するまで、カナダに在勤していた八一年八月から八四年八月までの間と八八年八月以降、チュニジア、ルクセンブルグ、ガボン、中央アメリカに勤務していた約一〇年間を除き、長い外務省生活の間、殆どの期間、ハンガリーを含む東欧諸国と日本との関係に関わって来た時には通商航海条約交渉、亡命者の受け入れ、コム（対共産圏輸出規制）違反問題等を巡って、対立したこともあったが、体制の相違にもかかわらず、

両国間の関係は当初多少ギクシャクした面は否めないが、概して良好で、比較的良好環境の中で仕事が出来た様に思う。

よく、「ハンガリーは好きですか？」と聞かれるが、「強い関心を持つています」と答える事になっている。ハンガリー勤務の間は、もちろん楽しい事ばかりでなく、特に、六〇年代の頃には、若干苦い思い出がないわけではない。多感な青年時代を過ごし、その後仕事上四〇年間にわたって付き合ってきた国には、単なる職業上の付き合いにとどまらず、多くの友人知人を通じた個人的な関係もあり、簡単に「好き」と言う言葉では言い表す事が出来ないものがある。アフリカにいた時でも、暇を見ては、年に一回程度の頻度でハンガリーを訪ね、長年にわたり、ハンガリー社会の変化を観察しながら、演劇、オペラ、オペレッタやコンサートを楽しんできたから、私のハンガリーへ

の感情を言い表すとしたら、一番自分の気持ちを良く言い表していると思う。

外交関係が再開された頃

第二次大戦後長い間日本とハンガリーの間の外交関係が途絶えていたが、一九五九年にプラハで、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアの東欧三国との間に外交関係再開に関する口上書が交換されたのを受けて、これら三国の中では、真っ先にハンガリーに在外公館を設置することが決まり、六〇年一月に、戦前最後の留学生で、私の先輩にあたる堀田磯行さんが着任し、マルギット島のグランドホテル内二階に公使館が開設された。私が外務省の戦後最初の留学生としてハンガリーに赴任したのは、その年の八月のことで、その頃には、堀田さんの他、初代小川清四郎公使及び吉岡一郎書記官が着任していた。これは全くの仮事務所で、

私が着いた八月には、公使館事務所は既に二区マルティロック通りの外交団アパートの一角に移転していた。ブランドホテル内には、小川公使の仮公邸があり、一人で毎日ホテルのレストランのテーブルに日の丸の旗を立てて食事をされており、同じホテルに三カ月程住んでいる間に、公使にしばしば呼ばれて、ご馳走になったが、未だ半分学生気分が残っていたので、日の丸の旗を立てたテーブルで食事をするのは少々気恥ずかしくて、周りの人の視線ばかり気にしていたので、正直に言って余り食べた気がしなかった。

当時はハンガリーのヴィザの入手に手間取り、赴任するのにも何かと手間暇がかかった。もっともハンガリー人へのヴィザ発給も時間がかかったからお互い様ではあったが。私の場合も、出発の大分前からヴィザの申請をしていたにもかかわらず、外交旅券を持った留学生という点が

引っかかったようで、結局出発前にはヴィザは貰えず、チャトルダイ初代公使(その後外務次官となったが、ブダペスト郊外で、趣味の軽飛行機を操縦中事故死)より、「ウィーンの大使館で間違いなく発給するので、予定どおり出発していただいて結構である」との確約を出発前に貰い、ようやく予定通り何とか出発出来たが、初めての海外勤務だったので、ウィーンでヴィザをもらうまではかなり不安な気分だった。

ブダペストに着いてからも大変だった。外交官として登録していながら、留学生と言う事で公使館へも行かず、ふらふら国内を歩き回っていたので、疑いの目を向けられ、留学、在勤期間を通じて、尾行や電話の盗聴を受けたり、友人が警察に呼び出されたり、余り愉快でない経験を結構させられた。こんなこともあって、当時ハンガリーに対しては、どうしても良い感情を持つ事が出来ず、何

かと批判ばかりしていた為、ハンガリー側からも余り良い目でみられていなかったようだ。

着任当時のこと

当時の赴任ルートは、アンカレッジ、コペンハーゲン経由で、ウィーンに着いたのは、出発から約三六時間後だから、殆ど丸一日半を今のジヤンボとは比較にならないくらい狭い、プロペラ機ダグラスDC-6の機内で過ごしたわけで、旅行そのものも相当苦痛だった。ようやくブダペストに着いた時には、疲労困憊しており、本当に遠くへ来た事を実感していたので、何年後かにここから無事に生きて日本に帰れるのだろうかかと心配になる位だった。六〇年と言うと世界を震撼させた五六年のハンガリー動乱から四年しか経っておらず、東西間の交流も活発でなく、ウィーンからブダペスト経由イスタンブール行きのオーストリア航空のフ

ライトは、乗客より乗員の方が多く、機内はガラガラで、夕闇のブダペスト空港で降りたのは私一人。スチューワーデスから、「ハンガリーは怖い所だから、気を付けてね」との励ましの言葉を背に受けて、タラップを降りた所で国境警備隊に、パスポートを取り上げられ、左右両方からしばらく懐中電灯を向けられたのにびつくり。空港もひどく暗く、辛うじて「BUDAPEST」のサインが読み取れる以外は、懐中電灯による目潰しの効果もあって、殆ど何も見えず。出迎えの吉岡書記官の車で、宿舎のグランドホテルに向かったが、当時の町中はひどく暗く、宿舎への途中明るく、光るものと言えば、中心部の党機関紙、コルヴィン百貨店と西駅前にあった国営保険会社のネオン位で、道路の照明も申し訳程度にぼつぼつとあっただけだった。動乱で市内の主要個所が滅茶苦茶に破壊されてからいくらかもたっていないかった

ので、ある程度覚悟はしていたが、暗いブダペストのたたずまいと歩いている人のひどくみすばらしい格好を見て、当時ハンガリー人が置かれていた苦境に同情すると共に、これから過ごすここでの生活の将来に早くも大きな不安を覚えた。

留学期間は二年間の予定だったが、結局、最後まで大学入学は認められず、これは留学ではなく、遊学であると自嘲していた。その上、一般ハンガリー人と西側諸国人との交流を病的に嫌っていた当時の政府は、公使館を通じて、頼んでいた家庭教師は紹介してくれず、ハンガリー人家庭での下宿先の紹介には三ヶ月もかかった上に、あからさまに外国人がハンガリー人家庭に住み込む事は通常許されないが、日本との友好関係にかんがみ例外的に認めると恩を売られる始末。この「友好関係に鑑み」との表現は、当時の共産政権からこのような恩着せがましい場面であれば

しば聞かされた。

希望に燃えて始めたハンガリー生活ではあったが、楽しい事は余りなかった。因みに、当時は日本人を含む西側の人は、勝手に事務所や住宅を探したり、人を雇ったりする事は許されず、全て外務省の外交団サービス局を通して行う事とされていたが、官僚的で、働く意欲は全く感じられず、西側外交団から、ノン・サービス局と呼ばれ、評判は最低であった。

という訳で、ハンガリー語とハンガリー文化の勉強は、結局独学に終始した。といえば聞こえは良いが、要するに暇に任せて遊んでいただけ。成果は、ハンガリー国内を隅から隅まで列車、バスで、殆ど行ったことがない村が無いくらい旅行した位。広大な大平原、メチェックやバコニの穏やかな風景や日本人に友好的な多くのハンガリー人の親切は、政府の数々の嫌がらせでともすると反ハ

ンガリー的になりがちであった私のハンガリー観を修正する役割を果たしてくれた。

何人かの友人も出来たが、日本人の友達がいると分かれると警察による嫌がらせを受けらしく、二三回会うと、ほとんど例外なく先方からこれ以上会いたくないと断られた。ケチュケメートでは何も知らずに、旧ソ連軍の基地の近くでとった写真を秘密警察に没収され、数時間足止めされると言う事件にあい、公使館を通じ、写真の返却と不当な取り扱いに対し陳謝を要求したが、三ヵ月後に外務省から返ってきた返事は、「そのような事実はなく、このような非友好的な要求は、両国関係増進に貢献するものではない」というもので、写真は結局戻ってこなかったし、陳謝どころか、「いいかげんな事を云うと承知しないぞ」とばかり門前払いを食ってしまった。当時は東西対立のさなかであって、こんな事件が

絶えず、米英独などの外交官が頻繁に国外に追放されていた。郵便物の開封、電報局を通じて送られてきた電報類がずたずたに切られていたり、大使館の事務所に盗聴マイクが埋めこめたりする事件もあって、両国間の関係は、とかくギクシヤクする事が多かった。

そんな中で、唯一の楽しみは、コンサート、オペラ、演劇に通う事であった。チケットは驚くほど安く、三〇フオリント（約一ドル）も出せば、一番いい席でオペラが見られるので、エルケル劇場とオペラ座には随分通ったし、ハンガリー語の勉強のため、カトナ、マダーチ、国立劇場（当時はラーコーツイ通りとレーニン通りの角にあった）にも時々行ったけど、さっぱり分からず、不勉強を恥じるのに役立っただけであった。もちろん今日のようにオペラ座やコンサートホールで日本人に会うことは全くなかったが、じろじろ見

られては、「キーナイ、キーナイ」と皆から言われるのには閉口した。

当時の公使館と在留邦人

六〇年一月に戦前最後の外務省留学生堀田磯行書記官が、戦後初のが国外交官とし着任、公使館仮事務所をマルギット島のグラントホテル二階に開設、すぐ二区のマルテイーロック通りに移転したが、アパートで事務所向きではなかった為、一年ほどいただけで、同じく二区のローメルフローリシュの現EU代表部建物に移転した。公邸は、長い間、二区のヴェールハロム広場に通じるアーフォニヤ通りの奥（現ノルウェー公邸？）にあり、現在の公邸に移る前は、二区のボガール通りにあった。

初代公使は、小川清四郎公使。フランスで研修をし、主に仏語圏の勤務が長く、外国語と言えばドイツ語が主流のハンガリーでは結構苦労さ

れていた。ヴァチカン大使を最後に引退後、長年輸銀監事として活躍した。六二年八月に小生が勤務を始めた直後に公使は吉田健一郎公使に代わっており、吉田公使の時代に、東欧圏とイスラエルなど数カ国しか残っていないかった公使レベルの外交関係を全て大使レベルにするとの本省の方針に基づいて、ハンガリーとの関係も大使レベルに引き上げられた。次席は、吉岡一郎一等書記官。本省では北東アジア課長として韓国、北朝鮮関係を担当した後、バングラデッシュ、チェコスロヴァキア大使を歴任。穏やかな、大変社交的な人で、外交団の人氣が高かった。いずれも鬼籍に入られたこれらの方々について、六三年にはロシア語の専門の岩崎剛書記官が着任して通商、広報関係を担当していた。館員は、公使以下私までいれて総勢五人の小公館で、当時はこの程度の大きさの大使館は少なくなかった。この体制は、海外

旅行の自由化による、渡航者と海外在住の邦人数が飛躍的に増え出した七〇年代のはじめ頃まで続いた。最初の在勤の頃には、両国間には文化協力協定もなく、国費留学生もおらず、当時唯一の在留邦人として、評論家兼歴史学者で、当時左翼の学生、知識人に人氣の高かった羽仁五郎氏の娘さんである羽仁協子さんが、音楽教育法コダーイシステム研究の傍ら、大学で日本語の講師をしておられた。公使館関係者として、小川公使の料理人として山内さんが、後任の吉田大使の料理人として加藤能巳夫妻がいた。夫人が日本人として戦後初めてハンガリーで出産されたが、妊娠中の医者診察に通訳として立ち合わされて本当に困った思い出がある。山内さんは長い間伊豆長岡で旅館の料理長をしていた。加藤さんは湯河原で旅館一元荘を営んでおり、行けばハンガリー料理を出してくれたが、このところもう何年

もお邪魔していないのでどうであろうか。公使館がローメル フロリーシユに移ってから間もなく、公使館の警備員として、法務省大村収容所勤務を最後に退官した名前も、顔もいかつい梶原軍三さんが着任されたが、警備員と言う仕事柄と言葉も分からなかったせいもあって、余り外出もせず、館内でじっと耐えておられた。両国間の交流も活発ではなく、私の在勤した四年間に、閣僚等の政府要人の往来は全くなく、往來したのは商社関係の人が殆んどで、それたまに來る程度で、街中で日本人に会うことは年に一回か二回という位極めて稀であった。偶然に街中で会えば、全く見知らぬもの同士でも、お互いに黙って通り過ぎるということはなく、挨拶を交わし、予定を調整し合っては、一緒に食事したりするのが普通であり、密かな楽しみの一つでもあった。数少ない來訪者の

中で、印象に残っているのは、オリンピック終了後、帰国の途次立ち寄った、山中毅、田中聡子の両メダリスト以下のローマオリンピックの水泳選手団。当時の日本水泳チームは結構強くて、応援する甲斐があったが、水球だけは殆んど全く歯が立たなかった。

この対抗試合をスタンドで観戦していた数少ない日本人の中に、後にヴィエトナムで行方不明になった辻政信参議院議員と数名の全学連の闘士がいた。「共産主義の現実を彼らに見せて、改宗させてやる」と言っていて、水泳はそっちのけで共産主義論争をしていた姿が印象に残っている。そのほかには、ハンガリー側の招待で来訪した労働組合等左翼系の人たちが、結構いたようだが、彼等はハンガリー側全額負担の賓客で政府や党の施設に泊まり、歓待を受け、帰国後発表する共産主義を礼賛する記事を見て来訪した事を知る程度で、偶

然にばったり出会う事は殆んど無かった。

東京オリンピックの前年には、釜本、杉山以下の全日本サッカーチームが、強化策の一環として、欧州転戦の途次来訪したが、当時のハンガリーには、アルベルト、ゴロチ、テイヒ等のスタープレイヤーがいて、ワールドカップの常連であったハンガリーの一部チームには相手にされず、ケチュケメートの二部のチームと対戦し、確か八・五の野球のようなスコアでようやく勝ったように記憶している。

当時の暮らし振り

当時の町が相当暗かった事は既に述べたとおりであるが、街灯も少なく、照明が暗かった事もあるが、中心部にある商店の中の照明もひどく暗く、じっと覗き込まなければ何を売っている店か分からない位だった。その上、どの店も店の中には皆が搜

し求める商品はなく、あるのは誰も買わないものばかり。「シヤイノシユ・ニンチュ」と言う言葉は何回も聞かされたのですぐ覚えた。何かが近く売りに出されるらしいと言ううわさが流れると、たちまち商店の前に長い行列ができ、人々は時には何時間も待たされることがあった。トイレットペーパーのようなものまで、しばらくどこにも売っていないと言う事もあったりして、そう云う噂に無関心では必要なものを手に入れるのは難しい状況であった。

郵便は、怠慢なのか意図的なのか、ひどく遅れて着いたり、或いは着かなかったりする事もよくあった。当時の館員は生活必需品の購入の為ウイーンへ行く機会を利用して、公用、私用を問わず郵便物の発送、受け取りをウイーンで行っていた。当時は、オーブダのビーチ通りからドログ、コマーロム、ジュールとドナウ川沿いに行く国道一号線を使っていたが、

交通量が少なかったもので、三時間半位しかかからなかった。余りに頻繁に通うので、国境警備隊員とすつかり顔なじみになってしまった。

コカコーラ、バナナ、オレンジ等当時のハンガリーではクリスマス直前にちよつと出て、春の淡雪のようになすぐ消えてしまうような貴重品を人通りの多いアパートの前で降ろす時が大変で、いつも見せてはいけないものを見せびらかしているような後ろめたさを覚えたものである。コカコーラを見た事もないハンガリー人から、「ツオツァ・ツォーラ」つてどんなものだ？ とよく聞かれた。もつとも当時は日本でも売られていなかったから、偶に接待した日本人からも珍しがられたが。

マルチイーロックの外交団アパートの単身者用アパートに五〇ドルも払わされたのは痛かったが、公共料金、食料品、劇場、スタジアムの入場料は非常に安く、バス、電車一フ

ォリント五〇フィレール払えば市内何処へでも行けた。レストランも安かったもので、独身者でも困る事は無く、若造の分際でグンデル、ゲレールト、キシュロイヤル等の当時の一流レストランでも時々食事を楽しむ事が出来た。東京にいた時には、新宿の汚い「ドブ板横丁」でラーメンをすすするような生活をしていた私にとっては、こんな良いレストランで肉をふんだんに使ったハンガリー料理を味わえる幸運を噛み締めていたが、冬場の観光客が少ない時には、客は私一人だけと言う事もしばしばあった。一人だけでジプシー音楽を聴きながらする食事と言うのも面白いものである。

車は極端に少なく、ワーツィウツァでも何処でも殆んど何処へでも自由に駐車出来たが、フオルクスワーゲンのような大衆車でも当時のハンガリー人には珍しがられ、駐車しているときと良く人垣が出来たのには

閉口した。車への関心は高く、ソ連製や東独製の車を買うのに、頭金を払ってから三年も待たなければ手に入らなかった。したがって中古車が異常に高く、ハンガリー人にとつては、三年かかっても四年かかっても、新車を手に入れるのが何より一番いい投資だった。

『ドナウ通信』(二〇〇一年秋季号)



小さな喜び

加茂 博行

夕食の準備で妻が台所でスパゲティをゆでている時だった。「加茂先生はブダペスト補習校に内定していますが、行きますか。行きませんか」。教育長からの電話は、前置きもなく用件だけを告げ、私にとつてもなく大きな判断を求めてきた。うろたえた私は「今すぐに答えなければなりませんか」と聞いたが、教育長はいかにも冷静に「そうして頂けると助かります」と答えるだけだった。焦っている自分と、冷静であくまでも事務的に問答をしようとする教育長。考えた時間はたぶん五秒くらいだったと思うが、人間は重要な判断をする時に、その判断によって得られるプラスのことより、リスクの方ばかりを考えるものだと感じた。言葉は…、子どもの学校は…、治

安は…、気がかりな事がたくさん出てきたが、「喜んで行かせて頂きます」の言葉が口から出た。半分本当で半分嘘、そんな気持ちだった。

フェリヘジ空港に降り立った時、季節はずれの雪が降っていた。鉛色の空と雪のせいもあってか、ブダペストへ向かう車の窓から見える景色は暗く寂しげに感じた。今思うと、その時の私は、家族と初めて離れて暮らすことで、不安という名のかなり濃い目のサングラスで街角を眺めていたに違いない。その後はカルチャーショックの連続であつという間に月日が流れていった。コンビニが無い。雑誌が読めない。言葉が通じない。薄切り肉が買えない。赴任期間は何年か分らないが、大変なことになったなあと思っていた。

しかし、現在ハンガリー生活を心から楽しんでる自分がある。物足りなく思えた平原の風景は、心休まる穏やかな風景に見えるし、街の雑

踏に身を置いても周りで行き交う訳の分らない言葉が気にならなくなつたのである。この心境の変化はいつたいどこから来たものか、自分でも不思議だった。

思うに自分の価値判断の基準が変わつたのだ。日本では「有ること」にばかりに目がいつて、「無いこと」の有用性に気付くことが無かつた。ハンガリーに来て生まれて初めて「無いこと」への積極的な価値を見いだすことができるようになったのだ。

古来、物事の判断には「無いこと」が深く関わっていたのではないだろうか。中国の古典「老子」にはこんな一節がある。

「埴（しよく）をこねて器を作る。その無にあたりて器のよう有り。戸（う）を穿（う）がちて室を作る。その無にあたりて室の用有り」。粘土をこねて器を作るが、大事なのは中の何も無い空間だよ。壁に穴

を開けて部屋を作るが、大事なものは中の何も無い空間だよというのである。人間に対する評価でも度量・器量というのは、内側の無の大きい人間という意味であつたはずだ。

今の日本は有ることばかりに目が向いているようだ。女子高生は夏休み前に自分のスケジュール表を見て、何もない日があると、友だちと一緒にそこを埋めるのに夢中になるという。そして、鞆の中にはその日会つたばかりの「トモダチ」と一緒に撮ったプリクラを、何百枚も貼ったアルバムをお守りのように大事にしている。最近の進化著しい携帯電話はデジカメ付きが当たり前になり、MP3プレイヤー、SDカードも使えるそう。機能を使えない人のための講座まであるという。何も無い一日を恐れ、アルバムが埋まらないことを恥ずかしがり、有り余る機能が使えないことに焦りを感じる。有ること日本社会は疲れ始めているの

ではないかと感じる。

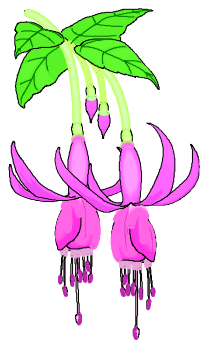
ゲーテは「外国語を知らない者は母国語を知っているとは言えない」と言つたという。大詩人の言葉を深いところまで理解するのは難しいが、簡単に言えば比較をすることで初めて物事の中心を判断できるといふことであろう。同じ事が国に関しても言えるのではないか。私はハンガリーに住むことで初めて日本という国の抱えている持病を知つたような気がする。

「何もありませんが、小さな喜びを味わえる国です」。あるハンガリー人が私に言つた言葉だ。その時には味わい深い良い言葉とだと思つただけだったが、後から考えると大きな事に気づいた。無いからこそ小さな喜びが際だつたのだ。「小さな喜び」という言葉は日本では死語になりかけていると思うが、ハンガリーでは素直にそれを感じることが出来る。日本の進んだ技術や娯楽は私たちにい

ろいろなものを与えてくれたが、小さな喜びを奪つてしまった。日本の子どもたちは小さな喜びを感じるのが難しくなつてきていると感じる。今ではこの地で子育てができることを「小さな喜び」と感じる毎日である。

たのしみは朝おきいでて昨日まで
無かりし花の咲ける見る時

橘 曙覧



ルート 33

小池 俊明

「この道の先には、どんな風景が、広がっているのだろうか？」

一九九〇年夏、旧共産圏諸国を転々と旅行していた際、英雄広場の先の交差点からまっすぐに延びる一本の道を眺めながら、ぼんやりと考えていた。「この道の先に行くことは、一生ないだろうなあ」。

それから七年後、まさか、その風景を毎週、車の窓から見るようになるとは・・・。

一九九七年から七年半、毎週仕事で通った工場は、ブダペストから約二百キロメートル東の **Kaba** という片田舎にある（ちなみにスロバキアには **Baka** というところもありま

す）。ブダペストからは、四号線で行くのと **M3** と三三号線で行くのと二つの方法があるが、後者の方が景色はよく、専ら私はそちらで行った。

M3 では、ひまわり畑、菜の花畑、マートルの山々が見渡せ、誰が見ても、すばらしいと思うような景色が広がる（特に **M3** 下り八二キロメートル、上り四四キロメートルにある休憩所から見るとひまわり畑は圧巻。また、上り五八キロメートルから先、前方に広がる景色は絵画でもみている様）。

M3 で **Budapest** から一三キロメートルまでいくと **Fuzesabony** で、そこから東に **Debrecen** まで三三号線が走っている。そしてその道に広がる風景こそが、私が今までハンガリーで見た中でも最も気に入っているところなのである。

Fuzesabony から小さな村を二つほど通り抜けるとまっすぐな並木道がつづく。この両脇の並木は秋にあざやかな黄色となり、冬が近づくに

つれて茶色になっていく。いずれも大変美しい。わきには、牧草地や畑があり、初夏にはポピーをはじめとする色とりどりの雑草がそこかしこに咲き乱れ、これまた、大変美しい。たまに、路上を行く牛の大移動にぶつかるときがあり、そのときは一分の足止めは覚悟しなければならぬ。みなくたびれたような牛ばかりだが、中には路上で求愛しはじめる元氣な輩もいたりする。

並木道の終わりにある **Poloszló** という村を越えたところ右手に、かわいらしいペンションがあり、その先が、**Tisza** 湖。道は湖を割るようになって走っている。この湖は一九七〇年代に **Tisza** 河をせき止めて作った人口湖だそうだが、ホテルやレストランといった観光設備が目に入らず、まわりはうつそうとした木々におおわれ、人工的な匂いが全くしない。観光客の姿もなく、目に入るのは、**Lada** か自転車で作ってきた釣り人

ぐらい（もつとも、三三号線から少しはなれたところには、泳げるところがあつて、夏にはそこその人が集まるようである）。沖には、小さな木舟が浮かんでいたりして、とにかく素朴で、自然で、観光地にありがちな押し付けがましさが無いのが大変良い。夏は緑、秋は茶、冬は雪の白に覆われ、季節毎の美しさで感動させてくれる。バラトンを太陽の輝きに喩えるならば、Tisza は洪い月の輝きだ。

しかし、ハンガリー人に Tisza が好きだと言うと大概の人は首をかしげる。「どうして?」、「何もないじゃないか」、「蚊がいっぱいいるぞ!」と皆冷ややか。湖の先には Tisza 河が流れていて、うっそうとした木々の中を流れる感じはアマゾン河みたいだ。河を渡る橋の事前に魚料理のレストランがあり、このテラスで河を眺めながら、泥臭いハラスレーや鯰料理に舌鼓をうつのは、なかなか

かオツである。ちなみに私の子供はこの「かえる」のフライが好物だ。レストランの脇では、二人組のお姐ちゃん、トラックの運転手目当てにいつも客引きをしている（Tisza 周辺では、カゲロウが大量に発生するそう、一年前だったか、National Geographic でその写真が掲載されていた。残念ながら私は七年半の間にその光景に出くわすことは一度もなかった）。

Tisza を越えていくと、Hortobágy National Park（正確にいうと前述の Tisza 湖もこの公園の一部）。この公園は、はユネスコ世界遺産に登録されている大平原で、バードウォッチャーも多く、ヨーロッパでも有数の「バードウォッチングスポット」、とのこと。しかし、今まで私が見たのはカラスばかりであった。実際に望遠鏡を担いだウォッチャーがいるから、珍しい鳥もいることはいるのだろう。ここは公園といっても平原が

あるばかりで、特筆すべきスポットも少なく、多くの人は退屈に感じてしまうだろう。強いて挙げれば、Hortobágy 村の民族博物館、小川にかかる小橋、ロシア製の戦車の展示くらいか。あと、平原を馬車で巡る、おなじみ?のプスタツァーがあり、たつぷりと心行くまで平原を堪能したい向きには最適。二十人ほどをギューギューに詰め込んだオンボロ馬車がガタガタとひたすら平原を走る。途中、降車ポイントがいくつかあり、「涙物」のアトラクションも用意されている。

そのひとつにバーニングウォーターショーだったかウォーターファイヤーショーだったかそんなのがあつて期待して見たのだが、蛇口から流れる井戸水にライターを近づけると、水が天然ガスを含んでいるため、一瞬、火のようなものが、見えるというものだった。その後、このショウはアトラクションからはずされた

いう噂を人づてに聞いた（自慢ではないが、私はこのプスタツアーを二度も体験しています。ハンガリー人はこう言うそうです。「Hortobagy」に一度も行かない奴は、ハンガリー人じゃない。でも二度行く奴は、頭がおいしい」。

しかし、私はこの退屈な平原が好きである。遠くに木々が見え、時々ある井戸、納屋、牛や羊のいる風景が好きである。夕日に、それらが、シルエツトで映し出されるのを見ると、郷愁を感じ、とても心地のよい気分になる。それから霧に煙る雪の平原を走ったときは、とても幻想的で、まるであの世でも走っているのではないかという感じがした。もっとも下手すれば、本当にあの世を走っていたかもしれないが。この公園のはずれに私の通った工場がある。三三号線に広がる景色は驚くようなものではない。ガイドブックに大きく取り上げられることもない。に

も関わらず、私がそれを好きなのは、長い間、通ったお蔭で、その景色の最も映えるときを捉えられたからかもしれないし、細部に気付くことができたからかもしれない。あるいは、その時々 of の思い出が残っているからかもしれない。それより、私がへそ曲がりだからだろうか。片道二時間半の道のりを毎週運転しても、飽きることがなかったのは、これらの景色があつたからである。七年半住んだ程度で、また限られた付き合いの中でこう言うのも勇気がいるが、私はハンガリーの人たちが好きだ。人たちの親切なところ、素朴さ、暖かさ、賢さ、哀しさ、ユーモアのセンス、慎みが好きである。そうしたハンガリーの人たちと、三三号線周辺の Tisza や Hortobagy の中に、魅きつけられる同じ「何か」を感じる。ハンガリー人に話しても、「？」という反応がくるような三三号線の景色だが、その魅力は、私が感じるハン

ガリーの人たちの持つ魅力に通じている。

いよいよハンガリーともお別れである。七年半通い詰めた三三号線。その風景は、ハンガリーでの思い出とともに一生焼きついてはなれることはないだろう。そして、おそらく、再び見ることもないだろう。いや、ひよっとすると・・・。



魚買出しアドリア海の旅

石崎 茂則

私はハンガリー駐在が二度目です。およそ一〇年近い駐在の間に、いろいろな旅行を経験しました。

最初の駐在は一九九〇年から一九九五年で、この時は子供が一緒でしたので、ごく普通のヨーロッパ各都市の家族旅行をしました。2度目の駐在は(二〇〇〇年)女房と二人だけですので、いろいろと様変わりな旅行をしました。二度目の駐在も終わりに近づき、近々帰国予定ですので、皆様に参考になるアドリア海の魚買出し旅行を紹介したいと思い、筆を執りました。

アドリア海と言いましてもイタリア側ではなくクロアチア側です。クロアチアには有名な世界遺産がたくさんあります。ご存知の方も多いかもしれませんが、本論に入る前に簡

単に紹介させて頂きます。

まず、もっとも知られている景勝地 Dubrovnik ですが、ここは車で行くには遠過ぎるので、飛行機で行くことをお勧めします(私は車で行って大変な思いをしました)。ホテルはちょっと高級ですが、海に面した Excelsior をお勧めします。旧市街地まで歩いて行けますし、景色が最高です。旧市街地の散策の中で一番のスポットが城壁の外の断崖にあるカフェで、そこから夕日を眺めながら飲んだビールは最高でした。

それから二泊三日の車で行けるコースとして Plivice 湖群、Split、古都 Trogir を紹介します。まず、Plivice まで車で約5時間。ここで一泊します。夕方まで湖群を三時間ほど散策。もし、体力に自信があれば、翌朝、別なコースを散策することを勧めます。翌日は Split まで移動。ここに一泊し、史跡めぐりをして、翌日、古都 Trogir を通って帰る二泊

三日のコースです。なお、Split にも小さな魚市場がありますので寄って見てはどうでしょう。

次に本題の魚買出し旅行ですが、せっかくですから少し足を Pula まで伸ばし、Rijeka で二泊三日するコースを紹介させて頂きます。勿論、魚買出しだけなら一泊二日で十分です。ブダペスト、Rijeka 間は約五百キロで六時間かかります。M7↓7号線で Nagykanizsa を通って国境の町 Letenye まで約三時間、国境は空いていますのでトイレ休憩、両替を済ませます。クロアチア通貨はクナで約一八円です(面倒なので二〇をかければ良いです)。

国境からすぐに高速で Zagreb に向けて走ります。途中、料金所があり、料金は三〇クナです。Zagreb はリンク状になっていて、Rijeka の標識に向かって進みます。そこから高速に入り、途中に高速道路が途切れる所があり、そこは標識に従い一

般道を通ります。この道沿いには子豚の丸焼きの店がたくさんありますので、ここで昼食を取るのをお勧めします。

Rijeka のホテルですが、Bonavia をお勧めします。インターネット予約は次のサイトでできます。

<http://www.budget-travelers.com/>

カード決済で簡単に予約できます。

Rijeka はアドリア海の最も奥まった所に位置する大きな港町で、非常に大きな市場があります。野菜は屋外、肉・魚は屋内市場。大きさはブダペストの中央市場に匹敵します。目的の魚市場には、その日の朝に上がった非常に新鮮な魚がたくさんあります。これから夏場はやはりアジで、タタキ、干物に最高です。クロアチアはマグロが有名で時々、解体しているところに出くわします。輪切りにする前にトロ、カマの部分を一キロ特別に切って貰うことです。値段は他の部分と同じで、刺身、煮

付でおいしく食べられます。それから、イカですが、ヤリイカ、コウイカなどいろいろなのが年中あります。冷凍できますので甲の部分は刺身、イカ納豆に、げその部分はスパゲッティ、唐揚げ用にとさばいて冷凍しておきますと便利です。

魚市場の話はこれぐらいにして、Rijeka から少し足を延ばして Pula 日帰りツアーを紹介します。Pula はイストニア半島の先端に位置し世界遺産に登録されています。Rijeka から二、三時間で、途中海岸線が非常にきれいです。Pula には円形競技場など有名な史跡が在る他、リゾート地で海水浴も楽しめます。また、シーフードレストランがたくさんあり、安くて非常においしいです。

クロアチアは隠れた穴場ですが夏場は混雑しますので早めに予約することをお勧めします。

なお、市場は日曜日、祝日は休めで、普通は午前中だけ営業しています。

す。休み明けも魚が少ないので気を付けてください。また、クロアチアはガソリンスタンドが少なく、幹線でも五十キロ以上も無いこともざらです。ので早めに給油することをお勧めします。



どっかに行きたい症候群

岩井 孝博

私には、中学生頃から身に付いてしまった放浪癖というビョーキがあり、一、二か月すると発病し、小林旭主演の映画、渡り鳥シリーズの影響なのか、どこかへ行きたくなってしまうのです。

日本を出て、英国に来て十三年。そして今、ハンガリー生活二・五年生。

英国生活の環境にも慣れた頃から、フランス、アテネ、リバプール。東京、トルコ、グラスゴー。ヘキサム、ローマ、ペンザンス、と行った先で二、三日うろうろすると、気が済むのです。

例によって病気が再発したある日、引越し屋さんのパンフレットに、写真入りでハンガリーの温泉の記事が載っていたのが目に入りました。記

事を書いた「パブリカ通信」の当時編集長だった佐藤さんの名前と、連絡先がありました。英国にも、お風呂の語源になったバースという町に、見学だけの温泉があります。が、実際の日本の温泉のような所が、ヨーロッパに在る事に驚き、早速電話で教えてもらい、始めてブタペストに来たのが、二〇〇一年の五月だったと思います。

ブタペストに来て、何とか着きました、と佐藤さんに電話を入れますと、時間があれば一緒に食事でもと誘われるがまま、F U J I レストランに行きました。

そこでサーライ社長を紹介され、四方山話の中で、日本の板前さんが居ないので、手伝ってもらえないか、というお誘いを受け、条件次第です。ねということ、その時は別れました。

その後何度か、ロンドンとブタペスト間でF A Xをやり取りしている

うちに、とても気さくな方という印象が強くなり、八月の花火大会の話にはすぐ乗って、再び遊びに来ました。

大砲の爆音にも似た花火の華やかさの中に、ハンガリーという国の歴史を振り返ってみました。

歴史書によれば一九四五年、第二次世界大戦は日本の無条件降伏をもって終わっています。日本は、アメリカの全権大使ダグラス・マッカーサーを迎え、一方ハンガリーは一九五六年、旧ソ連の傀儡政治を担ったカーダール・ヤーノシュを迎えたとあります。この大戦には日本もハンガリーも、それぞれ自国のポリシーに従って、参戦したと思えますが、連合軍には適わなかったようです。そして東の日本にはアメリカ資本主義が、西のハンガリーには共産主義が入ったようです。その後、日本やハンガリーに限らず、多くの国々は悲喜こもごも長短相携え、紆余曲折

の社会機構を経ながら、五十年という時間を過ごした事になります。

私は目の前で、日本とハンガリーを見比べる事ができ、歴史を目撃しているような感激すら覚え、興味の尽きないハンガリーで私の病は重症になり、二〇〇一年十一月から滞在しています。

ここでも病気は再発し、社会主義という社会を見たいと思い立ちました。

そして社会主義が色濃く残る、ウクライナ共和国の首都、キエフに行ってきました。まず観光ビザの必要な事、入出国の際には現金の持ち合わせを検査される事に驚き、啞然としながらも、目盲ら蛇に怖じず的な興味にそそられ、様々な階層の知人に、話を聞いている内に、七十八対二十二という数字を思い出しました。これは庶民と財産家の人口比率で、お金の額面では逆転します。つまり銀行のお金を百とした場合、一部の

財産家のお金が七十八%で、後の十二%が庶民のお金、今にもその財産家が、銀行を気に食わないと言つて、お金を引き出したなら、その銀行はどうなるの、すずめの涙ほどとはいえ、庶民のお金はどうなるのでしょうか。

財産家は権力者を養い、権力者は財産家に都合のいい法律を作り、金だけが物を言う社会になって、賄賂談合袖の下がまかり通る。いや、通っていました。

昔のハンガリーもこうだったのかな、と思いました。

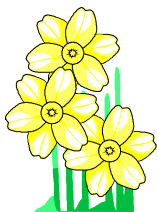
片目で世界史を見ても、こうした社会の状況下では、英雄とおだてられた庶民が、常に国の犠牲になって、血を流してきたことは、歴史がはっきりと語っています。

二〇〇四年五月、果敢なハンガリーは急速な時代への追い込みで、ついにEU加盟を果たしました。これからEU諸国の厳しい仲間と、

うまくやっていくには、バリヤ・フリーの問題を抱えていそうな公共の設備、交通機関の整備対策などを含め、国民が最も関心を持つ収入と物価のバランスを、どのように納得させながら、保ち得るかという、新たな経済政策、そして社会体制の渦中に、その身を投じたようにも見えます。

小手先の見てくれや、その場しのぎのやり方、たまたま見かける技術優先で利用者不在の設備では通用しない社会になっていくようです。

政治家の才覚が大きく問われるという、目には見えない心の変革をどうするか、ハンガリー発展の根幹を成すように思え、いよいよ楽しみです。



その時私は天使に出会った

竹内 勝則

四月二〇日に赴任して三週間が経った五月一日の夜九時二〇分、私はフェリヘジ1の前の道路で自爆してしまった。

九時到着予定の日本からの出張者を出迎えに行っていたのですが、予定が一時到着と遅れたことでその時間にフェリヘジ1の辺りを運転していたのでした。

二日前に初めてフェリヘジ2への道を教わったばかりでした。教わった時は昼間でした。道順を頭の中に叩き込みました。当日は遅れ無しで飛行機が到着していれば、私は八時には空港に着いていたでしょうから道が視界から消えることは無かったでしょう。

二車線道路の左側を走っていました。昼間とは違い暗くなっているから

空港までの道は、私には不安でした。

「この道でいいんだよね」、「まだしばらく走るんだっけ」、「この辺りにあるんじゃないかな」と左右をきよろきよろ見ながらの走行でした。

その時突然道が無くなって、路肩にぶつかりました。そのままに乗り上げ標識を飛ばしポールを押し曲げて止まりました。突然二車線から一車線になったのに気が付きませんでした。前輪が左右ともパンクしていました。一時到着の出張者を出迎えるにはまだ時間がありましたがいやう困り果てました。

その一時間前に携帯電話の電源を切る方法を教わり、やってみてからピンコードが判らず使用不可のままで出発していたのです。おまけにパスポートも免許証も持っていない、会社の人達に連絡する手段が無い、電話番号など頭に残っていないという有様でパニックになりました。

その時私は天使に出会ったのです。

バス待ちをしていたのでしよう、事故を目撃し車から出てきた私を見て体は何とも無いかと私に声をかけてくれました。二〇歳をちよつと越えた程度でしょうか、痩せた小柄で可愛い感じのする女性でした。マジヤール語は全然話せないと判ると英語で話し掛けてくれました。

まずポリスと呼ぼうということになり、フェリヘジ1に行つて警官を呼び現場に戻りました。警官の事情聴取を手伝ってくれましたが、名前と住所しか判らないのですから相手も大変でしたでしょう。レッカー車を呼ばなければならぬからと言って、その警官が知り合いの業者を呼んでくれました。

今考えればその業者の態度は胡散臭い感じがしました。とにかく一時に出迎えに行かねばならないことを伝えようすればいいかと聞くと、まずタクシーで空港へ行くというこ

とになりました。彼女も空港まで付いてきてくれることになりました。空港で彼女は別のレッカー業者を探し、一時半に現場に来るように依頼してくれたのです。あの警官が呼び寄せた業者は警官とつるんでいる可能性が高いので、高い料金を要求されるだろうから別の業者にした方が良いとのことでした。

それからその業者に断りの電話を入れてくれました。電話口で何か捨てせりふを言ったようでした。

私が「申し訳無い」「有難う」と恐縮しっぱなしでいると、生涯忘れられないような驚くことを彼女が話したのです。しかも、普通のことを話すような言い方で。

「そんなに恐縮ばかりしなくていい。私がしていることは極当たり前のことです。だって、貴方が貴方の国でパニックに陥っている外国人を見かけたら、貴方も私がやっていることと同じことをするでしょう？」

何と！ 頭の中と言うか全身が巨大なハンマーで叩かれた衝撃を受けました。

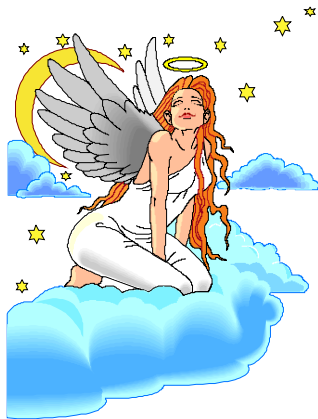
そういう理屈は頭の中では考えられませんが、実際に行動することは至難のことです。みんな自分の都合を持つていることを、私は知っています。この歳で、この行動をし、その背景を当り前のことをしているだけと言う、改めて彼女を見つめてしまいました。

自分にこの行動が取れるだろうか、極自然にこの様な言葉を出せるだろうか、ハンガリーの人はみんなこのような躰なり教育なりを受け人間的にここまで見事に行動できるのだろうか、と考え込んでしまいました。出張者が現れ、タクシーで現場へ戻り、レッカー車と一緒にアパートへ戻りました。

その途中で、「もう大丈夫でしょうから、私はここで帰ります」と言っ

て彼女が消えてしまいました。体は幸い何ともありませんでしたが、パニックと天使に会えたことで頭の中がぐちゃぐちゃになってしまいました。

五日経った今日も彼女の言葉が頭の中に強烈に残っています。「だって、貴方が貴方の国で・・・」。ハンガリーの天使に恥じない自分ではなければ、と思う私です。



日本人の「忘れ物」

村松 佳奈

「ガタガタガタ・・・」

道が悪いのに加え、お世辞にも全運転とはいえない運転のせいで、車体はかなりゆれている。人の波にのまれそうになりながら、私はつり革にしがみつくので精一杯だ。

今私がいるのは、ここ、ハンガリーで走っている公共バスの中。青い車体でポピュラーなこのバスは、地下鉄や、路面電車と並んで便利な交通手段になっている。

今日は土曜日、時間は午後五時頃。帰宅時間にあたるのか、バスの中はスシ詰め状態だ。おまけにバスがしよつちゅう揺れるせいで、立っているのも難しい。とにかく転ばないようにしなきゃ。それにしても、こんなにバスがこんでいるなんて思いもなかった。ああ、運が悪い。

差すような日差しに目を細めながらそんな事を思っているとバスが悲鳴のようなブレーキの音をあげて止まった。赤信号らしい。つかの間の休息にほっとして、何気なく前のほうを見ると、黒いサングラスをかけた女の人が目に付いた。ジョギングでもしていたのか、ジャージを着ている。このこんでいる中で、ラッキーにも座席を獲得していた。たぶん黒いサングラスのせいだろう、怖そうに見えるその人は、足を組んで窓の外を見つめていた。もちろんサングラスの後ろの表情は、分からない。それ以上、その人のことをあれこれ詮索する気もなかったもので、私も窓の外に目をうつした。窓からは、相変わらず日が差しこんできている。どうもハンガリーの強い日差しは、弱まる事をしらないらしい。そのまぶしさに、思わず私が手を額にかざした時、バスは再びブレーキをかけて止まった。バス停に着いたのだ。

「ギギギッ・・・」

ぎこちない音を立てて、バスの自動ドアが開く。三つあるドアから、人が流れる様に降りて行く。いつの間にか、バスの中の人は結構減ってきていた。まだまだ座席はいっぱいだったけれど。

バスが走り出した時、ふっとドアのほうを見ると、まだ小さい女の子と、背の高い女の人の親子連れがいるのに気がついた。さっき止まるときに乗ってきたのだろう。女の方は、席があいていないと分かったらしく、連れてくる女の子をドアの近くの手すりにつかまらせて立っていた。バスは相変わらずガタゴト揺れながら走り続けている。

その時だった。私の目の端に、あの黒いサングラスの人が映った。小走りに、ドアのほうに走っていく。今ごろ何をする気なんだろう。バスはもう走り出しているのに。何だか気になるので見ていると、なんと黒

いサングラスの人は、さっき乗ってきた親子連れのほうに走っていった。女の人の肩をつついていった。少し驚いたような顔で振り向いたその女の人に、黒いサングラスの人は、自分が座っていた座席を指差して何か言っている。とたんに、女の人が笑顔になる。そして、つれていった女の子を、その座席に座らせた。

ああ、あの黒いサングラスの人は、女の子の為に席を譲ってあげたんだ。わざわざドアの近くまで行って、声をかけてあげたんだ。黒いサングラスの人は、私の目に、とてもまぶしく映った。さっきまで散々怖そうなのなんだのと思っていたことを反省しながら、私は、その黒いサングラスの人に、心の中で、拍手を送っていた。なんだか、心があったかい。そのとき私は知らなかったのだけれど、ハンガリー人は、こんなふうに、小さな優しさを自然に与える事ができる人達だそう。バスに車

椅子の人が乗ろうとしていたら、周りの人が、助けてあげる。私達日本人がハンガリー語を分からなくて困っている、そばにいる人が、英語で通訳してくれる。そういう事を、年齢や性別に関係なく、誰でも自然にすることが出来る人達だと。

日本で十一年間も暮らしていて、私はバスで人が席を譲り合ったり、誰かが他人を助けたりする場面を、数えるほどしか見た事がない。バスには「席を譲りました」という張り紙があるし、「お年よりにやさしくしましょう」というフレーズは、いろんなどころで使われているのに。もちろん私も日本人だ。人に親切にしようとする時に、「ありがた迷惑」と言う言葉が頭の中をぐるぐるまわったり、他人に親切にする事が気恥ずかしく思ったり、そう言う心境は、すぐよく分かる。実際私もその一人だったのだから。なにも日本人全てが、冷たいわけじゃない。

やろうと思っても、踏み切れない人達だっている。

けれど、私は、ハンガリーのバスの中で、教わった。本当に誰かのためを思っている事は、決して迷惑だなんて思われたいと言う事。それに、そういう事をしている人は、すごく輝いて見えると言う事も。きっと、日本人は、時の流れの中で、それを忘れてしまったんだろう。経済的にはハンガリーよりも、発展してきた日本。だけど、そのかわりにきっとなにか大切なものを忘れてしまった。それを取り戻す事ができたら、もっと幸せな国になるような気がする。窓の外で、空の色がだんだんオレンジ色になってきた。いつのまにか、日差しはやわらかなオレンジの光になって、窓から差しこんでいる。にっこりした女の子の席の後ろには、黒いサングラスの人が立っている。きつとあのサングラスの下には優しい笑顔があるんだろうと思った。

ハンガリーに来て良かった？

林 健介

「僕の海外生活は、無駄にはなっていないだろうか？また、ハンガリーに住んでいてなにか、得はあるだろうか？」

勝手に他国の良し悪しを決めることは善いことではないが、それでもたまにこのように思うことがある。僕は、東欧諸国（特にかつて、社会主義国だった国）に対して、さほどいい感情を持っていなかった。なぜか、とても陰気な感じがしたからである。本を読むと、「旧東欧諸国のなかで、最も改革の進んだ国」と、ハンガリーは、かなりいい国というように書かれてあった。父も、「ハンガリーは、東欧諸国のなかでも優秀な国だよ」と、言っていた。しかし、僕はそのハンガリーでさえ、あまり良い国とは思えなかった。

確かに政治、経済面では、進んでいるかもしれない。またフン族の移住（四世紀頃）に始まる長い歴史もある。古代ローマ帝国時代の競技場などのような多くの遺跡もあり、なかなかおもしろい国でもある。僕は、歴史に興味があるので、このような点では、かなりいい所だと思う。

しかし、生活面ではどうだろうか？特に言葉と食事の面である。言葉の面で一番大きいことは、広く英語が通じないところだろう。夜、僕が廊下を、歩いてふと父の部屋を見ると、父が苦勞してハンガリー語を勉強しているところをよく見る。また、家の修理をしてもらう時も、父や母が言葉について苦勞している様子を見ることが、しばしばある。確かにハンガリーで有利に生きるためには、ハンガリー語が使える方がいいということは良くわかる。それでも、「英語がもっと通じれば、父も母もここまで苦勞しなくてもすむの

に・・・」と、つついっと思ってしまう。

食事の面では、僕が日本人だから思うことかもしれないが、和食があまりたくさん食べられないというところだろう。もちろん米はあるが、やはり日本のジャポニカ米のようなねばりがない。これは、文化の違いもあるだろうから仕方のない話だがなんとなく物足りない感じがする。

しかし、ハンガリーも悪いことばかりではない。ハンガリーには、ここに住んでいなければとても見る時間がないという文化遺産が数多くある。もしロンドン、パリ、ウィーンなどに住んでいたらこれらの物をすべて見るということは、できないだろう。

また、ハンガリーは日本に比べ日本人がよく行くイギリス、フランス、スペイン、ドイツ、オーストリア、エジプトなどに近い。日本からは十数時間かかるところが、ハンガリー

からは、二、三時間で行けてしまう。そして、時差ぼけが殆どないから楽である。

僕は、思う。その国が好きかどうかは、人それぞれでは、ないだろうか。僕は、ハンガリーが好きでもあるし、ちよつと気に入らないところもある。

僕は、ハンガリーの首都であるブダペストに移り住む前は、東京に住んでいた。そこでの学校生活が楽しかっただけに、

「ブダペストに引越しするぞ」

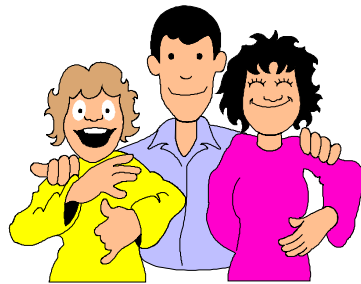
という父の言葉を聞いたときは泣いてしまったが、今では僕は、海外生活がどんなにすばらしく、かつ貴重な経験かということが分かってきた。アメリカンスクールでは、牛の目の解剖をやったり、古代文明についてはるかに詳しく学んだりした。ハンガリー文化についての勉強も海外（ハンガリー）ならではのものだろう。また、スポーツにおいてもやっ

ていることは、日本よりレベルは高いと思う。なにしろ外国への遠征があるのだから。僕は、陸上のチームの遠征でポーランドの首都ワルシャワに行ったことがある。このような外国への遠征のときは、選手はホテルで寝泊りするのではなく、遠征先の国の家庭に滞在する。いわゆるホームステイである。これもまた海外でなければ経験できない事ではないだろうか。

なによりも海外生活の大きな利点は、言葉も生活文化も違う人々と交流できるということだと思う。僕は、ブダペストに来て多くの国の人々と出会った。アメリカ人、イギリス人、韓国人、中国人、フィンランド人、そしてもちろんハンガリー人や、その他、多くの人たちだ。日本の中でもハンガリー人の友達がいるという人は、そうそういるものではないだろう。このように、外国人の友達をつくるというのは、とても貴重な体

験だと思う。

僕は今、ハンガリーでの日々を楽しく過ごしている。少なくとも僕の海外生活は、少しの無駄にもなっていないと今は思う。そしてぼくは、改めて思う。
「ハンガリーに来て本当に良かった」と。



中欧散文

稲川 照芳

ハンガリーのEU加盟

この五月、ハンガリーは他の中欧諸国とともに、EU（ヨーロッパ連合）に加盟した。五年前の一九九九年にNATOへの加盟を果たしており、これによって名実ともに欧州の一員となった。

中欧諸国とバルト三国のEU加盟は、第二次大戦後の「鉄のカーテン」によって東西に引き裂かれた欧州分断の終焉を意味する。ハンガリーは八九年五月、ショプロンの鉄条網の一部を開放したことから、一月の「ベルリンの壁」崩壊のきっかけを作った。また、ハンガリー経済は一九六〇年代末から、社会主義体制の枠の中で、経済改革を始めていた。このような先駆的行動を思えば、八

九年以降の体制転換過程を経て、EU加盟を実現したことは、ハンガリーの努力の帰結であると言える。

ハンガリーの歴史を振り返ると、紀元一〇世紀、イシュトヴァーン国王はキリスト教に改宗し、これを国教とすることで、流浪の民であったハンガリー民族を欧州に帰属させ、中欧の覇者としての地位を確保することになった。しかし、一六世紀以降、三百年にわたるオスマントルコによる蹂躪と、オーストリア帝国による支配を経て、漸く一八六七年の妥協（アウスグライヒ）によりオーストリア・ハンガリー二重帝国の時代を迎えた。この最後の五〇年間の繁栄の時代は、やがて第一次世界大戦によって消滅し、敗戦国として国土の三分の二を失うことになった。さらに、第二次世界大戦に敗戦し、それ以後、ソ連の支配下に置かれた。この間、一九五六年には、ソ連の支配体制から離脱を目指した「ハンガ

リー動乱」が、ソ連の戦車に踏みじられるという苦い経験を持つ。

こうして見ると、今回のEU加盟は、ハンガリーが千年にわたる歴史の中で、漸くにして、戦争と圧政からの自由を獲得し、安心して経済の発展と個人的自由、人権確保に専念できる「制度」としての欧州に身を落着けることができたと言えるのではないかと思う。

ハンガリーにとって、二〇世紀の大半は苦渋に満ちたものであった。その発端は、何と言っても第一次世界大戦の戦後処理を取り決めたトリアノン条約（一九二〇年）にあることは衆目の一致するところである。民族自決権を主唱するウィルソン米大統領の提案にしたがって、ハンガリー王国内のルーマニア人、スロヴァキア人、クロアチア人、セルビア人を解放・独立させるという表向きの理由で、フランスが盟友ルーマニアの国土拡大とセルビア支持し、

チェコ政治家マサリクの巧妙な国際的運動によってチェコ・スロヴァキアの独立が達成され、ハンガリーは二〇万平方キロの領土を失い、近隣諸国に数百万人のハンガリー人が取り残された。歴史的にも例を見ない無惨な平和条約を結ばざるを得なかったのは、列強諸国や周辺民族の思惑もあるが、敗戦直後の国内の混乱で、ハンガリーが強力な外交交渉力を欠いていたことにも原因がある。

それから八〇年余の今日なお、これらの国境外のハンガリー人を支援し、本国との文化・生活水準の格差を解消することが、ハンガリー外交・内政の主要課題になっている。私はハンガリー着任当初から、ハンガリーの人たちに、時代錯誤と考えるほどの強烈な愛国心を感じていたが、以来ハンガリーの歴史を学ぶにつれ、それも無理からんと理解するに至っている。スロヴァキアがハンガリーと同時にEUに加盟し、数年

後にルーマニアやクロアチア、そしていずれセルビア・モンテネグロがEUに加盟することになれば、国境の壁が消滅し、ハンガリー民族分断の苦悩は大幅に緩和されることになる。EU加盟は短期的には、ハンガリーに農業分野に困難をもたらし、競争激化による問題をひきおこすだろうが、中長期的には所得水準の向上、インフラ整備、経済力の上昇をもたらし、ハンガリーにいつそのの繁栄をもたらすものと考えている。

中欧の復権

中欧諸国はロシア、ドイツ、オーストリアなどの大国の干渉を受けながらも、ヨーロッパの歴史的・文化的な一体性を築いてきた。

一三三五年、ドナウ河畔の山城ヴィシェグラードでは、ハンガリー国王がポーランド王とボヘミア王との間の紛争を調停し、中欧の安定と経済通商の発展を図ろうとした。これ

に因んで、ポーランド、チェコ、ハンガリー、スロヴァキアの四カ国は、体制転換後、「ヴィシェグラード4」として、協調関係を進めてきた。

第二次世界大戦後の冷戦下、欧州は「東欧」と「西欧」に分裂し、「中欧」概念は消滅した（ただし、一九七〇年代からNATOとワルシャワ条約諸国の間で始まった通常戦力削減交渉の対象地域は「中欧」とされたが、それはオランダ、ベルギーからノルウェー、ブルガリア等を含む、広い「政治」的地域であった）。しかし、この冷戦下でも、たとえばチェコのミラン・クンデラ、ハンガリーのジョルジ・コンラードなど作家の間で、中欧文化ないし中欧文化圏（Mittleuropäischer Kulturraum）が語り続けられてきた。

一八世紀以後、この地域はオーストリア・ハプスブルグ支配下で、共通の文化圏を形成してきた。この中欧の文化は、西欧のそれとどこかが

違う。愁いをたたえ、人の心を和ませ、バロックの華やかさと過去を引きずる香りがする。中欧の音楽に造詣の深い小林研一郎氏は「中欧の文化とは、懐かしい心の和む、居心地の良い香りのする文化」と形容した。私の見解に、大きく肯いてくださった。ハンガリーに着任して訪れたセーケシュフェーヘルヴァール、ヴェスプリーム、ショプロン、セゲド、ヴァーツの町並みは、そういう雰囲気を与えてくれる。

中欧はまた、モーツアルト、ベートーヴェン、ハイドゥン、ショパン、スメタナ、リスト、バルトークの世界である。これをドイツ、さらに東ドイツ地域にまで広げると、バッハ、ルターのプロテスタント文化、ゲーテ、シラーのドイツ古典主義文学の世界が広がってくる。

抑圧と人工的・政治的分断の数十年を経て、人間の尊厳と個人の自由の尊重、文化と芸術活動の自由が保

障され、経済の回復が進めば、再び中欧が復権し、その文化も花咲く時を迎えるのではないだろうか。

中欧への道…三十年戦争

私が始めて中欧の歴史に触れたのは、一九六六年の夏である。日本の大学在学中、奨学生として一年間、ドイツ・フライブルグ大学に学んだ。帰国を前に、学生寮の友人ペーターの両親が住むヴュルツブルグ近くの町を訪れた。今では日本人観光客に知られた「ロマンチック街道」の所々にある十字架のキリスト像と、傍らの小さなチャペルを指さしながら、「この辺り一帯は三十年戦争で徹底的に破壊され、荒廃の地になったんだよ」とペーターが説明してくれた。黄色に色づんだ一面の麦畑と、遠くに見えるバロックの教会の塔が見渡せる平和でのどかな光景に、まるでそぐわない悲惨な歴史の光景を脳裏に浮かべた。高校の世界史教科書で

ほんの数行触れられるだけの「三十年戦争」の地に立ったという不思議な感覚をとらわれたのを覚えている。

一九八〇年代初め、外交官として西ドイツのボンからチェコ・スロヴァキア的首都プラハに赴任した。プラハとチェコは中世から近代の歴史の宝庫である。一七世紀初め、ボヘミア（首都プラハ）王はオーストリア・ハプスブルグ皇帝が兼ねていた。カトリックのオーストリア支配に反対したボヘミアの新教徒貴族が、オーストリアから派遣されていた役人をプラハ王宮の窓から突き落としたことが発端（一六一八年）となり、以後三十年にわたり、新旧キリスト教徒や、オーストリア、フランス、バイエルン、スウェーデン等の世俗権力を巻き込んだ戦争が欧州大陸で繰り広げられることになった。

ボヘミアでは戦争二年目に、プラハ郊外の「白山の戦い」で、ハプスブルグ・旧教の勝利に終わった。三

十年戦争の勝利国フランスは、欧州の国家秩序（オランダ、スイスの独立を含む）の形成を主導し、他方で主戦場となったドイツは国土の荒廃と多数の領邦国家の分立に苦しみ、統一国家樹立は一八七一年まで待たなければならなかった。私はその後、一九九〇年代前半、デュセルドルフ総領事を務めたが、管轄下のミュンスター市にある「ウエストファリア平和の間」（条約が締結された場所）をしばしば訪れることができた。

三十年戦争への興味は、その戦争の中で数奇な運命を辿った人間の生き様にも注がれる。その代表的人物は、ワレンシュタインであろう。新教徒ボヘミアの傭兵隊長ワレンシュタインは旧教への改宗と富豪の未亡人との結婚によって財を成し、軍略の才を発揮して、ハンガリー、ボヘミア、北部・東部ドイツを駆けめぐり、ハプスブルグ皇帝軍の中で頭角を現し、将軍の地位と伯位を得た。

一六三二年には、ニュルンベルグ近郊の戦いでスウェーデン王グスタフ・アドルフと争い、皇帝から希代の英雄として認められた。その一方で、和平を画し、ボヘミア王を狙っているという疑いをかけられ、部下の手で一六三四年に暗殺された。

私がプラハ在勤当時、チェコは共産党支配下で経済が停滞し、文化遺産は荒れ放題になっていた。プラハ王宮の下にあるワレンシュタイン宮殿もしかりで、それでも雪降る寒い冬のプラハでは、その美しさが際だっていた。ワレンシュタインが暗殺された町ヘブ（ドイツ名エガー）も、暗く物悲しい影が色濃かった。彼を悲劇の英雄と見るか、一級の外交官と見るか、それとも強欲で権力にとりつかれた男と見るか。いろいろな見方もあるが、変転する当時の中欧の歴史に翻弄された人間の一人であることは間違いない。

「マリエンバートの悲歌」

ドイツ・ワイマールの文豪、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは、壮年以降、湯治と岩石・地質研究の目的で、十数回にわたり、西ボヘミアの温泉地、カールスバート（チェコ名カルロビバリ）やマリエンバート（同マリアンスケラズネ）を訪れた。一八二一年から二三年のゲーテのマリエンバート滞在は、晩年のゲーテの人生に大きな刻印を残すことになった。二一年に七二才となったゲーテは、宿泊先で若き未亡人アマリア・フォン・レヴェエツオと十数年振りに再開する。アマリアはウルリケ（一七才）を初め、三人の娘を帯同していた。ゲーテの関心は若くて健康的なウルリケに向かう。彼女はストラスブルグで学んでおり、若きゲーテがストラスブルグ研修中に出会ったフリデリケと出会った思ひ出（「野バラ」に結集する）が重なり合ったに違いない。

二二年と二三年の夏、マリエンバートではゲーテが連日、ボンボンやチョコレートを携えて、ウルリケに地質学を教えたり、詩を朗読して聞かせたりした。ゲーテの心は恋から結婚へと膨らんでいった。この話はワイマールの息子と嫁に伝わることとなり、やがてゲーテが仕えるワイマール公は、それとなくアマリアに、ゲーテとウルリケとの結婚の可能性を問い合わせている。

二三年八月、アマリアは突然三人の娘とともに、カールスバートに宿を移したが、ゲーテもその後を追った。夏も終わりに近づいた八月二八日、ゲーテとレヴェツオ母子は、連れだって郊外の溪谷の町、エルボーゲンに遊び、「白馬亭」で昼食をとった。テーブルの上には、「ウルリケ、アマリエ、ベトラ」の三人姉妹の名が刻印されたボヘミアグラスが置かれ、レヴェツオ夫人は「私どものこと、そしてご一緒したことを、いつ

までも思い出にしてください」と語りかけたという。この日、ゲーテは七四才の誕生日を迎えた。夏の終わりとともに、九月五日、ゲーテはカールスバートを後にした。これがカールスバート、マリエンバート、そしてウルリケとの最後になった。

すでにゲーテは別れを感じとり、「悲歌」の著作に着手していた。ワイマールに戻ったゲーテは、病がちなとなり、以後八二才で亡くなるまでここで過ごした。文豪ゲーテの最後の恋はこうして終わった。

今でも、マリエンバートの公園の片隅に、ゲーテと少女ウルリケが、心なしか愁いをたたえて佇む像がある。また、エルボーゲンの「白馬亭」の中には、ゲーテとレヴェツオ母子が語らう壁画ある。ウルリケ・フォン・レヴェツオは生涯独身を通し、北ボヘミアのティプリツアの修道院にて九一才で没した。死の年、ゲーテとの関係について、「恋愛関係とは

言えなかった」と語ったという。

「ドン・ジョバンニ」

批評家小林秀雄の「モーツアルトのこと」を読んだのは、高校時代だった。大学入試によく出るというのが動機であったが、街の雑踏の中でモーツアルトの交響曲四〇番の冒頭の旋律を耳にした印象の描写が鮮明であった。そして、モーツアルトにとって、ト短調が特別の意味を持っていたということも知った。オペラ「ドン・ジョバンニ」に本格的に興味を持ったのは、プラハに在勤してからである。

モーツアルトは、プラハで自作「フィガロの結婚」を指揮し、大好評を拍した。「フィガロ」は前年五月にウィーンで初演されたが、評判は芳しくなかった。皇帝や貴族達は宮廷貴族社会のモラルを批判したものと捉えたし、サリエリ等の音楽界のボス達の様々な嫌がらせや妨害と、ウィ

ーン人の保守性に突き当たったためであった。しかし、プラハはウィーンと違い、アンチ・ウィーン気質も働いて、モーツアルトの新しい、自由で市民社会の台頭を歓迎する人々が、モーツアルトを受け入れた。

ピアノリストで作曲家、そして資産家でもあるドウシエク夫妻もその一人であった。夫人のヨゼファは著名なソプラノ歌手で、モーツアルトの生地ザルツブルグの出身である。モーツアルトがミュンヘン、イタリアへの演奏旅行に出かける前の一七七七年、ヨゼファが里帰りで出会って以来の仲であった。宿と食一切を提供したトゥーン伯爵やドウシエク夫妻達友人と街中が、「フィガロ」、「フィガロ」を口ずさむ中、プラハはウィーンとは違う憩いの街となった。プラハ郊外のベルトラムカに、ドウシエク所有の別荘があった。一〇月半ばに到着したモーツアルトは、ほとんど毎晩パーティ三昧で、刻々

と初演の日が近づいていた。いよいよ明二八日のゲネ・プロを控えて、未だ序曲が完成していないことを心配したドウシエク達は、一計を案じて、モーツアルトをベルトラムカの別荘の一室に閉じこめた。モーツアルトは夜を徹して作曲し、朝の七時によく歌劇「ドン・ジョバンニ」序曲」が完成した。かくして、「ドン・ジョバンニ」は一〇月二九日に初演され、大成功に終わった。モーツアルトは、「私のプラハは私を理解してくれた」と喜びを表したという。

プラハでの大成功にもかかわらず、ウィーンでは「ドン・ジョバンニ」の初演は翌年五月のブルク劇場の公演まで待たなければならなかった。ウィーンでは依然として、モーツアルトに対する冷淡さに満ちていた。皇帝ヨゼフ二世も、「フィガロ」に比してしましたが、「ドン・ジョバンニ」は「ウィーン人の舌に合わない！」と評したと言われる。ある貴族の館

で催された批評会の席で、ただ一人の出席者を除いて、全員が「ドン・ジョバンニ」に否定的な見解を述べた。その一人がハイドンで、彼が「モーツアルトは最も偉大な作曲家である」と述べたその一言で、他の出席者は全員、口をつぐんだという。

こうしてプラハは「モーツアルトの街」となった。その後、モーツアルトは一七八九年四月、ベルリンへの度の途中に短時間滞在した。最後のプラハ訪問は一七九一年夏の終わりで、皇帝レオポルド二世のボヘミア王の戴冠式に歌劇「皇帝ティートの慈悲」の作曲・初演のためだった。この時、モーツアルトはミサ曲「レクイエム」と歌劇「魔笛」の作曲中だったが、初演を終えウィーンに帰るモーツアルトは顔色が悪く、気分は落ち込んでいたという。すでに病に冒されていた。この年の一二月、「レクイエム」未完のまま、永遠の眠りについた。

モーツアルトの死の年に生まれた末っ子フランツ・クサビア・ヴォルフガング（後にヴォルフガング・アマデウスと改名）は、音楽の才能を欠いていたが、母コンスタンツェに教育され、五歳の年、プラハで「パゲーノの歌」を歌ったという。その後、彼はドウシエク夫妻に預けられて養育された。音楽家として活動し、一八四四年、カールスバートで、五五歳で病に没した。今でも彼の墓はカールスバートの「モーツアルト公園」の片隅にある。

プラハ在勤中、私にとって最も大きな楽しみは、「ドン・ジョバンニ」が初演された劇場で、この歌劇を観ることであった。社会主義体制下で、能力のある声楽家や音楽家が「西」側に亡命する中、バリトン歌手ですでに盛りを過ぎたと思われるカレル・ベルマンの「レポレロ」は、洪く味わいの深いもので、これが初演の頃とほとんど変わらない場面で唱わ

れるのを味わえることは、堪えられないことであつた。

しばしば訪れたベルトラムカも、くすんだ雰囲気をつたえ、二百年前を偲ばせるものであつた。たまの週末、大使館の屋根裏部屋の宿直室で、どこからか聞こえてくる弦楽器の音色に、「モーツアルトの街」を実感し、二百年前の様子を想像して夜を更にしたものであつた。

考えて見れば不思議なことだが、現在、ウィーンでモーツアルトを弾いたり歌ったりすることは、音楽家にとつてたいへんなリスクであると言われる。それだけ、ウィーン人はモーツアルトの音楽について、耳が肥えているということか。そうだとすれば、モーツアルトに対して冷たく当たったウィーンが大きく変わったということなのだろう。

「マイヤーリンク」とハンガリー
一八八九年一月三〇日早朝、ウィ

ーン郊外マイヤーリンクにあるオーストリア皇太子ルドルフの別荘で、皇太子と一七歳の男爵令嬢マリア・ヴェチェラの死骸が発見された。二人の死は共に自らの命を断つたものと見られたが、完全に他殺説も否定されておらず、謎の死とされている。ルドルフはすでにステファニー王女と結婚しており、ルドルフとマリアの死は、皇太子と少女の不倫の恋の果てとして、「うたかたの恋」で映画化された。皇太子ルドルフの死は、世紀末という「時」と重なり、オーストリア・ハプスブルグの行方に暗雲を投げかけることになった。最も傷ついたのは、母であり、皇后であつたエリザベート（「シシー」）であつただろう。窮屈なウィーンの宮廷生活を嫌つていたシシーは、ますますさながら放浪の旅に傾き、九八年九月、スイスはレマン湖畔で、イタリア人の狂人ルチェニの犠牲となり、六〇年の生涯を閉じた。皇太子ルド

ルフの死は、シシーの造ろうとした歴史の挫折をも意味したのである。一八六六年、オーストリアはビスマルクのプロイセンと争い、七月のケーニヒスグレーツの戦いに敗れた。オーストリアは帝国の活路を東に向けるを得なくなった。ハンガリーでは一八四八・九年、オーストリアからの独立を目指してコシュート達の革命が起こされたが、弾圧されて失敗した。しかし、その後も、ハンガリーの自治を求めるアンドラーシ、デアーク達の運動も激しさを加えていた。シシーは皇帝フランツ・ヨーゼフ妃となって以来、ハンガリー語を習熟し、ハンガリー民族への同情を募らせていた。アンドラーシやデアークとの交遊も、それに輪をかけた。とくに、デアークは控えめで静かな性格の、非凡な才能を持った政治家で、亡命先からしきりに革命を呼びかけるコシュートと違い、オーストリア帝国内でハンガリー人の権利を

拡大する現実路線を主張していた。プロイセンに敗れ、弱体化したハプスブルグ帝国は、デアークにとってチャンスであった。他方、ハプスブルグにとって、西のプロイセン・ドイツと東のロシアに対抗していくために、血気盛んで強固な団結力を誇るハンガリーを取り込む必要があった。ハンガリーと妥協し、ハンガリーに権限を委譲することをためらうフランツ・ヨーゼフに対し、シシーはデアークとアンドラーシと会って話し合うよう、ブダペストからの書簡で説得し、そして「これはルドルフのためでもある」と結んでいる。シシーの仲介により、オーストリアはハンガリーと「妥協」し、一八六七年六月八日、オーストリア・ハンガリー帝国が誕生することになる。皇太子ルドルフは母親の影響もあつてが、ハンガリーに同情と親近感を持っていた。ハンガリー内の民族問題にも通じており、それだけに、

ハンガリーの支配層が国内のルーマニア人、スロヴァキア人、セルビア人等の少数民族の誇りや苦悩への無関心や無知をあらためないことに警告を発していた。

ルドルフの死は二重の意味で、ハンガリーの運命とかかわつて来ると言えないだろうか。一つは、ルドルフの後に皇太子となったフランツ・フェルディナンドは一九一四年六月、妃とともにサラエボで暗殺され、これを契機にオーストリア・ハンガリー帝国は第一次世界大戦へと突入し敗北する。その二は、ルドルフと違い、フランツ・フェルディナンドはハンガリー民族を嫌い、理解しようとしなかったと言われている。

歴史にIFは禁物だが、その後、二〇世紀に辿ったハンガリーの苦難の歴史を見るにつけ、あの「マイヤーリンク」がなければ、ハンガリー、いや中欧の歴史も、あるいは違ったものになっていたかも知れない。

八年ぶりのブダペスト

瀬川 智恵子

思えば、一九九二年の春、夫の転勤に伴って、初めてブダペストに足を踏み入れた当時、私は東欧という地域に全く予備知識が無く、不安と心配を抱えて空港に降り立ったものだった。そのころ、日本ではハンガリーに関する書物や資料は極端に少なく、周囲にハンガリーを知る旅行者もいなかった。

日本で外国をイメージするときには、まず英語が来る。その英語でさえ私は満足にできない。ハンガリーはマジヤール語という特殊な言語を話す国で、ソ連の共産圏から脱して三年の国だった。

始めから、ハンガリーに対して、感覚的に一歩後ずさりしていた。まして、そこでの生活など、想像する

こともできず、いわば鎧兜で身を固めて戦地に赴く、緊張しながらの出陣のようなものだった。

暗い気持ちで真夜中のフェリヘジ空港に到着した時、税関係官のマジヤール語の質問にパニックになった。出迎えてくれた会社のハンガリー社員達の優しく美しい笑顔を見たとき、鉛のような肩の重りが外れた。どれだけ心が和み、安心したことか。

最初に出会った夢のような光景。光の中へ吸い込まれるシンデレラの気分させられたのは、静かで、気品に満ちた、幻想的な風景。世界文化遺産に指定された鎖橋とドナウ川の夜景だった。

言葉が解らなくて随分苦労した。世界共通語の英語で、なんとかいけるだろうとの高をくくった予想は完全に外れた。実生活の場は、すべてがマジヤール語だったからである。「ハーフ・キロ」とソーセージを注文したところ、「ハートゥ(六)・キ

ロ？」と問い返され、英語を話したのだと勘違いして、ウンウン、頷いたら、いつまでたっても袋に詰めるソーセージの手が止まらない。レジの前で冷や汗が出てきた。〇・五キロを買うつもりが六キログラムの凄量のソーセージを買って帰るはめになったのである。「もう、結構」とも言えず、店員を呼び止める言葉さえも知らず、ただ、おろおろするばかりだった。

ブダペストの街は、そのころ光と色と装飾品が無く、信号も少なく、確かに暗かった。道路もでこぼが多かったし、走る車は古いソ連製のラダや東ドイツ製のシュコーダ、チエコ製のトラバントが目立っていた。息子が通っていたブダペスト日本人補習校では、ハンガリー人の子供も多く学んでいて、なかなか優秀だった。特に、算数がずば抜けていたように思う。外国の小学校では、日本人が常に算数ではトップを奪うと

聞いていたが、ハンガリーではあたらなかった。

それもそのはず、調べてゆけば、ハンガリーという国は、受賞地は違っている、国民一人あたりにおいては、ノーベル賞受賞者を最も多く輩出する国だという。しかも、オリンピック金メダルの数においても、同様のことが言えるらしい。文武両道に秀でた信じがたく優秀な国であることを知ったのである。

滞在中の出来事で思い出すのは、夫がハンガリーの主要銀行社長から、オペレッタ劇場でのロック・オペラ『コロンブス』の招待券を頂戴した時のことである。

勇壮なオペレッタ鑑賞が終わった後、チケットの半券で抽選会が行われた。珍しいことをするものだと思つた。景品は、さきほどのオペレッタ、『コロンブス』にちなんだものばかり。船の模型セットや赤ちゃん用浮き袋、コロンブスの絵本の類で、

値の張ったものではない。当選者は、キラキラの豪華な衣装を身に纏った美女たちから、うやうやしく景品を頂戴し、拍手の中、手を挙げて会場に消えてゆく。気取りのないアイデアが愉快で、対照的に、厳かな進行振りがおかしさに輪をかけた。

それで終わ리と思つたら、またコロンブスのテーマ音楽が流れ出し、幕が上がり始めた。どうやら二部があつた様子である。

場所の設定が銀行内部に変わり、話の筋がまったく違う喜劇『コロンブス』が始まった。そこで初めて、これは銀行行事の一環で、行員たちによる創作オペラだと気づく。つまり、会場の人々も行員関係者だったのである。

社長、副社長が喜劇役者の役回りを見ずからこなし、幹部社員たちが多彩なキャストを占め、会場を爆笑の渦に巻く見事な演技振りである。なにより、演技者がはつらつとした

表情で、劇を心から楽しんでいる様子が伝わってくる。観客席から送られる惜しみない拍手に溶けた喜劇は、深い印象を刻んで私の心に残った。

ハンガリーは資本主義経済体制に踏み切ったものの、酷いインフレに喘いでいる。その国情とは別に、銀行という堅苦しい数字の世界で仕事をする人々が、一方で仕事の合間に時間を作り、こんな本物の役者顔負けのオペレッタを創作し、楽しみながら練習していたとは何と文化度の高いことであろう。

ハンガリーは「音楽の国」と呼ばれるが、それは専門的な音楽家たちの世界を示すだけの言葉ではなかった。市民レベルに至るまで、音楽が広く深く理解され、浸透していることを知る機会になったのである。

私は少なからず、ショックを受けていた。夫も含めて、仕事、仕事と、しかめ面をして机に向かう日本の猛烈サラリーマン達が、仕事帰りに食

べたり、飲んだり、カラオケに通ったり、休日にはゴルフやマージャンに明け暮れたり、仕事以外の楽しみ方がいつも画一的なことを思い出したからだろうか。一人が新しい行動パターンを提案しても、果たして賛同する会社員はどれほどいるだろう。こんな音楽的企画が計画されるなど遠い話だという気がした。

日常の暮らしの中に、ごく自然に音楽文化が存在し、大枚を叩かなくても十分に愉快な人生を楽しめるハンガリー人銀行員達の心の豊かさを羨ましく思った。

たった一晚のわずかな時間の中で、私達が、この国から学ぶことは数多くあるに違いないとの予感を覚えたものである。

そして、マジャール語を学ぶことから再スタートを切った三年間のブダペスト生活は、私の人生にとって、どれほど実り多いものだったかわからない。

* * *

昨年九月六日、夫と二人でブダペストを再訪。正式なEU加盟に向けた街の変化を見に行く目的もあった。

機内のアナウンスで、慌ててシートベルトを締め、近づいてきたブダペストを上空から食い入るように見下ろした。足を踏み入れた空港から、ブダペストは既に違っていた。明るいスマートなフェリヘジ空港。ヨーロッパの他の空港と変わりの無い快適さだった。

私の一番のお気に入り、鎖橋の夜景を目指した。何年経ってから眺めても、世界のどこにもない静かな美しい眺めが、期待を裏切ることなく、私を出迎えてくれた。

忘れていたマジャール語が、街の角を曲がったとき、突然浮かんできた。市電乗り場をマジャール語で訊くと、「オットバン」(あっちだよ)

との応えに、懐かしいブダペスト生活が戻ってきたような気がした。

十二区の住宅は、勿論、他の誰かが住んでいて、当たり前のことなのに、ちよつと寂しい気持ちになった。

それにしても、日差しが明るく暖かい。鳥の声が聞こえ、緑が目眩しかった。アポル・ビルモシュ駅はモダンな公園駅に整備され、花壇の花々が楽しそうに揺れている。近くの教会の鐘の音を聞きながら、線路伝いに、どこまでも続いて咲き乱れていたレース・フラワーを思い出す。

ブダペストの街は、こんなに平和で、静かで、住みやすそうな街だったのだろうか。

近代的で品数豊富な街のスーパー・マーケットで、ようやく昔を見つけた。袋入り牛乳である。今ではどこにでもあるカートン入りミルクの横に、冷水の中に重ねられて置かれた、コンニャクのような袋入りの牛乳。当時、買ったばかりのものでも、

品質に疑問を持つことがあって、カートン入りを待ち焦がれたものだったが、今見ると、懐かしい貴重品だ。

噂には聞いていたが、西駅の近くには数階まで続く大々的なショッピング・モールが出来上がっていて目を回した。素晴らしく近代的で、世界中の有名店が軒を並べ、映画館、日本のすしバーまで店を構えている。

屋上は緑を配した庭園にしつらえてあり、環境にも配慮が見える。当時、駅を改造したハンバーガーショップの内装の優雅さが話題を呼んでいたが、もはや目立ちもしない。

今回は観光客としてブダペストを訪れたせい、ブダペストの西欧化と発展が順調に進んだせい、ブダペストを第三者的に眺めて、本当に魅力溢れる街だと思った。

街の特徴にもなっている数多くの温泉は、風呂好きの日本人には、たまらない楽しみである。大教会ドームの趣を持つセーチェーニ温泉内部

の岸辺のように楽しげな人々の様子を窓越しに眺めるだけで幸せな気分になった。滞在ホテルの温泉プールでは、勿論、毎晩、水泳とバブルジェットバスを楽しんだ。

住んでいたころには経験したことがなかった船で行く夜のドナウ川観光も、また風情のあるものだった。船上で食事と音楽を楽しみながら、中世の街並みの夜景を眺める贅沢。

川風が心地よく、輝く街の灯りが水面に映えて、忘れられない思い出の場面を臉に焼き付けてゆく。

嬉しかったのは、ブダペストで世話になったハンガリーの友人たちが、突然の訪問にもかかわらず、飛んで駆けつけてくれ、両手を広げて迎えてくれたことである。お互いに、少し歳をとって、背中が丸くなり、髪の毛に白いものが増えてはいるが、八年前の友情はちっとも変わっていない。ハンガリーの友人はいつ

も率直で温かい。気取らずに肩を組める余地を残した国民性を感じる。

二〇〇四年五月、ハンガリーは待望のEU正式加盟に調印した。決意を新たに、本格的にヨーロッパの一員として動き出すのである。関係のない私も、なんだか緊張してくる。加盟に伴って、各方面で、いろいろな問題も起きてくることだろう。

それでも、ハンガリーは、数百年にわたる幾多の水河期に耐え、困難を乗り越えて、自分たちの手で独立を勝ち取ってきた国である。きつと、近い将来、ヨーロッパの中の先頭グループで活躍をする国だと思う。

頑張っしてほしい。ハンガリーの新しい門出に際して、日本の片隅から、私も、ファンの一人として、友人の一人として、心からのエールを送りたいと思う。

ハンガリー政府観光局「二〇〇四年ハンガリー旅の思い出コンテスト」受賞作品

長距離走が教えてくれたこと

浅野 未希

その日、まるで子供が遠足に行く時のように、早く目が覚めた。六月六日 日曜日。今日はス&田銀行主催の「第一一回オリンピック・マラソン・リレー」大会である。

ブダペストの国会議事堂前をスタートしてドナウ川沿いをアルパード橋近くまで行った所で折り返し、マルギット橋の下をくぐって鎖橋を越えた所で再び折り返し、国会前に戻ってくる七・〇三二五キロ。このコースを六人がリレーし、フルマラソンの四二・一九五キロを駆け抜ける。爽やかな初夏の風に吹かれ、緑あふれるマルギット島や王宮の景色を楽しみながら汗を流すというブダペストならではの贅沢で最高のコースだ。七〇〇以上の参加チームにはそれぞれ特徴があり、上位を目指すプロ

の駅伝チームから学校、職場、友人、マラソン仲間と組んだチーム、中にはランニング用車椅子を使ってリレーするチームや全員がベビーカーを押しながら走るチームなど様々である。ジュニア・チーム、シニア・チームも参加している。

国会近くの路地には、地方からの参加者を運んできたバスが多数、停車している。私達の「日本・ハンガリー友好チーム」は男子二チーム、女子一チームの合計一八名で構成され、スタート地点から二〇〇メートルほどしか離れていない日本人会事務所に集まり、顔を合わせた。国会周辺の芝生や木陰で待機するチームが多い中、日本人会の皆様のご意のおかげで、恵まれた条件で準備し、走り終わった後はひと休みすることができた。

第一走者

女子チーム一番走者の私は、事務

所に到着して、早速ウォーミングアップを始めた。軽いランニングで今日の調子を確認する。レース後半に天候が急変したものの、この時点での天候は薄曇り、気温もほど良く、走るのには絶好のコンディションである。七キロの距離を三五分以内。これを目指にする。

マラソンコースは既に通行規制され、国会議事堂周辺は出場者と応援の人々であふれ、オーブニングのアナウンスとリズムカルな音楽で、活気に満ちている。お祭気分の中、チームのメンバーに見守られて、軽快にスタートゾーンへ向かった。

今まで何度か長距離走の大会を経験したが、スタートは重要なポイントである。七〇〇人もの走者が一気に走り始めるので、混雑と危険を避けるために一キロあたりの目標ラップタイムごとに、おおよそ並ぶ場所が区切られている。しかし、走者全員がスタートラインを越えるまでに

は一分以上もかかるし、人混みの中に埋没すると自分のペースを取りづらいで、どの位置に立つかをよく見極めなければならぬ。今回はスタートラインに近い前の方に並んだ。ただし、これは必ずしも賢い選択ではなかった。

出発時刻が近づき、カウントダウンの声が会場に響く。

harom. Ketto. Egy !!

勢いよくスタート。各チームの第一走者が次々と駆け出してゆく。今までに出場した大会と同様、スタート直後はできるだけ集団よりも前に抜け、自分のペースメーカーとなる走者を見つけていくつもりだった。ところが今回は少し様子が違う。各チームとも第一走者は速い人を配置している上に男性が多いので、後ろからたくさん走者に抜かれて、どんどん距離が開いていくばかり。自分と同じ速度で走り、目安にできるような人がいない。気持ちが焦る。

しかし、そのスピードに惑わされると、ペースが乱れてしまう。先の長い七キロを走りきるために、とにかく自分のペースを守ろうと考えた。

沿道からはたくさんさんの声援が聞こえてくる。それぞれのチームのメンバーや家族、友人、道行く人々、そしてドナウ川に浮かぶ船の上からも、私より先に折り返して、すれ違う集団の中に「日本・ハンガリー友好チーム」のメンバーを見つけ、お互いに励ましのサインを送る。普段、一人のランニングでは孤独に黙々と走っているが、こうして年齢や国籍に関係なく声をかけあうことで、走りを楽しむことができる。市民マラソン大会の醍醐味の一つである。

さて、そのようなことを考える余裕もなくなってきた頃、第二走者の待つ国会議事堂が見えてきた。目標の三五分が近づく。気になるゴールのタイムは、三四分四四秒。何とか目標を達成して、次の走者にバトン

を繋いだ。

どうして長距離走？

ところで、この私が長距離走を始めたのはどうしてだろうか。本業である「ヴァイオリン演奏の姿からはとても想像できない」と「ドナウ通信」をご覧になった方々から何度も尋ねられた。

昔から短距離よりは長距離の方が得意だったが、学校時代は体育の授業と卓球部のウォーミングアップで「走らされていた」程度で、特に競技会で長距離を走ったことはない。たまたま、昨年のこのマラソン・リレー大会で、「日本・ハンガリー友好チーム」の記録係のアシスタントのお手伝いをした。それまで全く縁のなかったマラソン競技会の現場で、想像以上の一般市民ランナーの数と大会の規模に驚いた。小学生の子供から高齢の方まで、それぞれの走りをし、大変満足そうな表情を見せて

いたのである。

このような雰囲気の中にいると、見学するだけでは何か物足りないものを感じた。走るのもおもしろそうだな、という気持ちと、しばらく長距離は走っていないが体はついていくだろうか、という二つの気持ちが入り混じってその日を終えた。

夏休みに入ってスペインのリゾート地に滞在した時のこと。ヴァイオリンの練習で曲のまとめ方に行き詰まっていた私は、気分転換にジョギングすることを思いついた。走るのは約十年ぶりだ。閑静な住宅地にある五キロの周回道路をひと回り。走るペースなど考えず、ただ素敵な家並みを眺めながらのんびりと走った。これが日課になり、五キロの時間を計るようになった。日に日に記録が伸びるのが楽しくて、徐々に目標タイムを上げていった。さらに五キロに慣れてくると十キロに距離を延ばした。逆に、思ったような結果が

出ないと悔しくて、暑さも忘れて朝夕二度、このコースを走った。まるで陸上部の合宿のように。

そんな夏が過ぎ、いよいよスポーツの秋。集中トレーニングで少し自信をつけた私は、十月のブダペスト女子十キロレースに出場することにした。意外と気負わずにマイペースで走り、ゴールした時には自分にも走ることができたという大きな達成感があったが、次回の大会では、さらに良いタイムを残したいと思った。と同時に、ふと、高校最後の体育の授業での先生の言葉を思い出した。

「卒業後は、人から運動させられることも走らされることもなくなると思います。だからこそ、自分で体を動かすチャンスをつくって生涯、スポーツを楽しんで下さい」。

今まで頭の片隅にそつと残っていたこの言葉。久しぶりに、スポーツをする喜びに出会えたことを心から嬉しく思った。

工夫や努力を重ねて一つの結果を出すことで新たに反省をし、次への目標が生まれる。その結果がどうであれ、挑戦してみることが、自分の力を知り、新しい一歩を踏み出すきっかけになるのだ、と改めて感じた。趣味に過ぎないマラソンが、専門である音楽に勇気を与えてくれた。

それ以後、普段の音楽生活の中でランニングをする時間をとるようになるがけ、様々な長距離走の大会にトライしている。今年のお正月に帰省した時には、家族を誘って地元の「元旦城山登山マラソン」にも初めて参加した。ハンガリーからの意外な「お土産」に驚いた様子だった家族も、マラソンで新年の健康を願うのも良いのではないかと好評で、我が家の恒例行事に加わりそうである。

新しい自分を発見できたランニング。今日もヴァイオリンの練習を終えたら、心地よい汗を流しに行こう。

大勝負

栗田 晃孝

それはある夕方、幕を開けた。

「中学一、二年の男子の中に七キロ走ってみたい人はいる？実は、日本人会でマラソンランナーを募集しているんだ。誰かやってみたい人！」。この加茂先生の一言に、何か大きいことをやりたいと思っていた僕は、

「先生、俺がやります」

と立候補してしまった。

元々、走るのには嫌いじゃなかったし、小学生の時、山の中の約三キロ離れた神社を走って往復したこともあるので、大丈夫だろうと思っていた。しかも、僕の他に二人の生徒も立候補していたので、安心していった。しかし、彼等はその後辞退してしまった。「こうなりや、意地でも走ってやる」と気合を入れ、トレーニング

の日程をたてた。

しかし、あいにくの悪天候で、トレーニングの日（暇な日曜日）は全滅。こんなので大丈夫かと不安は大きくなっていく。本番前日に新しいランニングシューズを買って気分転換になるかなと思ったが、不安は消えない。そして、その不安と緊張は当日、最大のものとなった。

ところが、日本人会のオフィスで皆さんと話しているうちに、緊張は解け、不安は期待へと変わった。ゼッケンをもらい、いざ会場へと向かう。そのときの心情は、「やってやる」という自信と、「完走できるだろうか」という不安が混ざった複雑なものだった。会場に来て、真っ先にコースを見て驚いた。出場チーム数七百以上！しかもテレビ中継も！これだけ大きい大会だと、相当の精神を持つ人しか参加できないなと思った。日本では、市民マラソンが滅多やたらに多いから、まずニュースになるこ

とはない。ブダペストではニュースのトップを飾るビッグイベントである。これには脱帽だ。

十一時、第一走者の茂木さんが他のランナーと共に、一斉にスタートする。こんなに大勢の中でもきつちりと自分のペースを維持されていた。

わがチームの第一走者茂木さんが帰ってきたのは三十一分後。かなり良いスタートだ。しかし、ここから最大の敵、太陽が走者たちの体力、気力を奪い始める。皆ペースが崩れ（勿論他チームの人々も）、自分にバトンが回ってきたのはスタートから三時間五分後だった。三時間半のチーム目標を達成する場合は、二十五分で完走しなければならないので、これはまず不可能。かえって気持ちが悪くなった。「どうせ無理なのだから、自分のペースで走ろう」と。走り始めて一キロ地点で時計を見る。四分十八秒。少し周りに気をとられすぎたか。しかし、ここからが



地獄となる。

ぼつぼつ降り始めていた雨が、一キロ半走った頃に本降りとなる。最初は、熱かったから丁度いいや、と

気にしていなかったが、二キロ地点ごろから次第に体力が減っていく。タイムは九分三十六秒。このままいけるといいが、ペースが自然と落ちてくる。三キロ地点で十五分を少し超えた。

給水所（丁度半分の地点）も見えてきた。ここで水二杯とスポーツドリンクを飲み干す。雨はまだ弱まりそうにない。落ちかけていたペースを少しずつ取り戻し、四キロ地点で二十一分三十秒。まだ遅い。体力ももう尽きる頃だ。さらにペースが落ちていき、五キロ地点で二十七分、六キロ地点で踏ん張り三十一分三十秒。

こうなったら賭けに出るしかない、全力疾走。今思えば、よくあれだけ走れたな、と我ながら感心する。ここで一気に突っ走り、三十五分と五秒ほどでゴール。六キロ地点からゴール（七キロ地点）までを三分五十秒ちよつとでゴールする。これはや

はり応援が力をくれたといっても過言ではない。

この「大勝負」は予想を上回る結果だった。が、母は、僕がゴールインするのは四十分以上たってから、もしくは途中で倒れて担架で運ばれてくる、と予想していたらしい。

走りきった後は疲れきつてよろよろしながら日本人会オフィスに戻っていた。初めてのマラソンは思ったよりも辛く、足も痛かったし、雨のせいで寒かった。でも、走れてよかったと思うし、完走したことを誇りに思う。

最後になりなしたけれども、盛田監督、チームの皆さん、応援してくださった皆さん、本当にありがとうございました。



四二年振りの十二キロ走

盛田 常夫

この歳になって、長距離走を思い立った。最初のトライが、二〇〇三年六月のマラソン・リレー。国会周辺の七キロを、六名で走るお祭りに参加した。長い距離を走る練習をしていなかったのでペースが分からず、残りの二、三キロは完全にばててしまった。タイムは二九分二〇秒だったから、平均時速一四キロを若干上回るペースで走った勘定になるが、最後はもうよれよれだった。こんなに辛い思いをしたのは久しぶり。心臓発作が起きなかったのが不思議なほど苦しかった。

本当に、この歳になって、こんな距離を走り始めるとは考えもしなかったが、秋に二度目のマラソン・リレーを走ってから、目標が膨らんだ。もしかしてハーフ・マラソンも行け

るのではないかと。

もつとも、マラソンは走る気がない。四二キロを走る脚のために、かなりのトレーニングが必要になる。「どんなに時間がかかってもいいから走りきる」、「一生に一度は走ってみたい」という人もいるが、こういう走り方はしたくない。マラソン・オタクのように、マラソン・レースを梯子する気もない。いろいろなスポーツを楽しみながら、年に数回、コンスタントに長距離のロードレースに出てみたい。一〇キロが手頃だが、最長はハーフだろう。ここらがほどよい限度だと考えている。

少年時代の記憶

誰にでも忘れられない記憶や原点となる体験があるだろう。小学校から高校まで同じ学校に通っていたが、クラスが違っていたので、ほとんど話したこともない同級生の名前を忘れることができない。向山貢君。僕

らは戦後直後のベビー・ブーム時代の出生だから、幼児期は終戦の食糧難の時代。小学校に入ってから、クラスの中には黄色い鼻汁を垂らしている子がたくさんいた。栄養状態が悪いのと暖房不足で、冬になると僕もちよくちよく病気をしていた。月額一八〇円ほどの給食代を払えない家庭もたくさんいた。その中で、向山君は小学生なのに、背丈が一六〇センチ以上もあり、体重も六〇キロを超える立派な体格をしていた。皆が貧乏していたわけではない。数は少ないが、金持ちもいたわけだから、栄養状態が良好な子供もいた。当時、文部省の健康優良児表彰制度というのがあって、向山君が小学六年で富山県の健康優良児に選ばれた。今から考えると、これは変な制度だ。栄養状態の良い子供を褒めても仕方がないだろうに。

これだけの体格だから、相撲をとっても強いし、走るのも速い。僕も

足は速かったが、小学校時代の駆けっこで向山君だけには勝てなかった。身長で一〇センチ以上、体重でも一〇キロ以上違う訳だから、これは次元が違っていた。子供の体格でこの差は大きい。本当に怪物君だった。中学に入ってすぐに春の運動会があり、何故か、競技種目に一五〇〇米走があった。当時の中学校は僕の学年で六〇人学級一二クラス。クラスから一人エントリーできるというので、僕が手を挙げた。小学校の徒競争で一番長いのは四〇〇米だったから、こんな長い距離を走りたい物好きな子は他にいなかった。僕もどうして手を挙げたのか覚えていない。一番難しそうなものに挑戦してみたかったのかもしれない。運動会の日まで、二〇日間ほど、自宅近くの小学校の校庭で毎日一五〇〇米を走って準備した。今でこそランニングシューズなどという気の利いた物があるが、当時は、練習も運動会も皆素

足だった。

各競技は学年別で、あの怪物君も一五〇〇米にエントリーしていた。いつもの通り、向山君は最初から短距離走のように先頭に立ってぐんぐん走り出した。とにかく僕は離されないように、彼の後にピッタリとくつついた。とても苦しかったという記憶しかない。後ろを振り返る余裕もなかったが、僕ら二人からは、皆、三〇〇米トラックを一周以上離されたと思う。残り二百米近くになったところで、最後の力を振り絞って向山君を追い抜こうとした。競り合いになるかと思っただが、彼も目一杯で走っていたのだらう。僕が抜いた途端に彼の力が抜けた。僕は息絶え絶えで、一位でゴールした。この時のタイムが、五分二五秒。小学校を卒業したばかりの子供には上出来のタイムだった。後で体育の先生のメモを見せてもらった。二年生の記録が僕より一秒遅く、三年生の記録

が一秒速かった。練習時の記録から一分半ほど縮めていた。

この運動会を契機に、向山君は陸上競技から足を洗い柔道に専念するようになり、僕は野球をやりながら、陸上競技の中距離を走る事になった。今から振り返って見ると、これが僕にとっても向山君にとっても、一つの転機になった。

故障に苦しむ

学校には陸上部というものがなかった。体育の先生がいろいろな運動クラブの足の速い者を集めて、市の陸上競技大会に出していた。中学一年生の秋、全市中学校の学年別大会の二〇〇〇米で優勝したが、膝下の軟骨が乖離するオスグッド・シュラッターの状態が悪くなり、三カ月ほど何もできなかった。

中学二年になって、最初のレースが四月の市の中学選手権。一五〇〇米で優勝したが、その後に肉離れで

再び戦列離脱。復帰直後の六月の市民体育大会二〇〇〇米はゴール直前で交わされて二位になったが、市の代表として全国放送陸上県大会と県民体育大会の出場権を得た。そして、これが人生の分かれ目になった。

当時、少年の最大の娯楽は草野球。夏の少年軟式野球大会のために、夏休みは朝から野球漬けの毎日。僕は隣町チームの「移籍強化選手」として五番レフトのレギュラー選手だった。チームが決勝まで進んだために、二〇〇〇米走の練習も合宿参加もなしで、県民体育大会にでる羽目になった。競技当日にプログラムを渡されるまで、予選と決勝の二レースがあることも知らなかった。練習していないからスピードが出ない。苦しみながら予選をなんとかクリアし、決勝でも六位だったか八位だったかに滑り込んだ。

ところが、翌日、右腰の痛みで歩けなくなった。両親には内緒で参加

した大会だから、競技のことも腰痛のことも黙っていた。今から考えれば、その時にきちんと治療しておけば、何も問題もなかったのだが。痛みが退かず、秋の体育授業はいわゆる「見学」扱いにしまった。体を激しく動かす運動ができなかった。

当時、晩秋には一二キロ走の「校内マラソン大会」があった。痛みは和らいでいたが、ここを無理するとまずいと思い、体育教師に「見学」を認めてもらい、大会整理の手伝いをする予定にしていた。ところが、この年の大会から優勝者には優勝杯が贈られることになり、これが廊下に陳列された。これを見て欲が出た。あの優勝杯が欲しい。校内に競争相手はいないから、走れば必ず自分が手にできるという思いが打ち勝った。

「先生、僕、走ります」と言ってしまった。これが間違いだった。

レースそのものは最初から一人旅で、念願の優勝杯を手にした。しか

し、この代償は大きかった。翌日には左腰まで同じ痛みを感じるようになった。「あー、これで中学時代のスポーツは終わった」、と思った。四二年以上も前、一九六一年十一月のことである。

それから一年経って、腰の痛みは完治していなかったが、中学時代の思い出にと、市の中学校対抗駅伝レースを走った。区間新で区間賞を取り、チームも過去最高の二位でゴールしたが、僕にとってこれが陸上競技で最後の公式競技になった。高校入学前に硬式野球部の春の練習に参加したが、腰が引つかかって全力疾走できなかった。何度も入部の誘いを受けたが、野球をやるのを断念した。以後、競技スポーツの世界から完全撤退した。ベビー・ブーム世代の進学競争で、野球部から誘われた運動能力が高いクラスの友人たちも、結局、誘いに乗ることはなかった。僕らが皆一緒に野球をやっていたら、

甲子園に行けたかもしれない。それほど高い運動能力と体格を持っていた友人たちがいた。もっとも、スポーツを失った代わりに、また別の価値ある高校時代を過ごしたとも言える。

ブダペストで再開

それから一五年以上も経ち、慢性化した腰痛も気にならなくなり、そろそろ何か始めようかという時に出会ったのがテニス。しかし、ここでも早々とテニス肘になり、これも慢性化した。原因ははっきりしていた。ほとんど足を鍛えていない状態で始めたテニスだから、腕力に任せた手打ちになっていたからだ。テニス肘で一〇年以上も苦しんだ。

一九八八年にハンガリーの日本大使館に赴任してから、再び、走りだした。もう腰痛は気にならなくなったし、テニス肘をカバーするために、とにかく足を鍛えることが肝心だと

考えた。大使館の若い書記官たちと、マルギット島を走るのが日課になった。といっても、長い距離を走るのではなく、道路に記された一〇〇米ごとの目印にそって、一五〇〇米走のタイムを測るという走り方だった。要するに、昔の中距離走の記憶を辿りながら、一五〇〇米をどれくらいのタイムで走れるのかを競った。正確には覚えていないが、一カ月ほど、五分三〇秒前後で走れるようになったと思う。四〇歳を過ぎても、中学一年時のタイムが維持できるというのが、嬉しかった。

しかし、喜びも束の間。一九九〇年には左膝に水が溜まるようになった。テルマル・ホテルのマッサージ師に膝を強く曲げられた瞬間に、水が溜まっていた付近で鈍い音がした。マッサージ師に注意するのを忘れていた。時間の経過とともに、みるみるうちに膝が膨れ、翌日には腫れと痛みで動けなくなった。隣家の医師

に膝の専門医を紹介してもらい、水を抜いてもらった。以後、この年は日本とハンガリーの病院で、合わせて六回も水を抜いてもらう羽目になった。

一九九一年に再びハンガリーに赴任する折、遊離軟骨除去の内視鏡手術の相談をした。手術をすれば、さらに数カ月 of 安静が必要だから、それより膝周辺の筋肉を鍛えて様子を見るのが良いという診断だった。以後、膝の調子を見ながら、またマルギット島で一五〇〇米を走るのが、日課になった。

四二年振りの長距離走

もともと気が長い方ではないから、何事もだらだらとやるのは性に合わない。同じペースで長い時間を走る、変化もない球を打つというのは駄目なのだ。だから、テニスや中距離走のように、激しい競技を好んできた。何度もゴルフに誘われたが、一度も



やったことはない。ブダペストの長距離レースにも誘われたが、出ようという気さえ起こらなかった。ところが、何故か、昨年来、長い距離を走ってみようかという気になった。歳をとって気が長くなった所為か。

あるいは、一人でもできるスポーツは気軽だからか。もともと血圧が高いから、中距離走は良くないことは分かっていた。だから、七、八分目のスピードで長く走る方向に転向した方が良いとは考えていた。

今年（二〇〇四年）四月四日、

MATAV主催の春の恒例レースは、あの悔やまれる校内マラソンから実に四二年振りの一二キロ走になった。中学時代は練習なしでも走れた距離だが、この歳でそうはいかない。長距離を走り始めて一〇カ月。今、ようやくこの距離を走ること、不安がなくなった。体調が良いわけではない。軟骨が遊離している左膝は常に悪化しないように気を付けなければならぬ。右膝から右足の甲にかけては、痛風炎症の定期的な発症で、腱が硬直している。右腰は中学時代の腰痛。昨年来の長距離走で、左大腿関節周辺から嫌な痛みを時折感じる。毎日、その日の膝や腰、大腿関

節の状態を見ながら、走り方を考える。これ以上の故障は許されないから、鋭い痛みがある時はトレーニングを止める。こうやって自分の体を騙しながら、一〇キロの距離を四二分前後で問題なく走れる体を作ってきた。

MATAVレースは今年の「走り初め」。春先はまだ体が出来上がっていないから無理せず、最初の三、四キロはスピードを上げない。一キロ平均四分一五、一六秒（時速一四キロ）で、五二分以内でゴールする。左大腿関節付近の痛みが出たら、即座に走りを止める。少し厚めのシューズで、ショックを和らげる。これが自分で決めたレースプラン。

ほとんど無風の絶好のコンディションだった。ほぼコンスタントなペースを保って、一二キロを五〇分一七秒で走り終えた。目標タイムをはるかに上回る出来過ぎの記録。一〇キロを四一分四五秒で通過したので、

最後を頑張れば五〇分を切れると思ったが、すでに足が参っていた。何しろ、このレースまで今年はランニングマシン上でしか走っていない。だから堅いアスファルトや石畳は足に堪えた。ゴールまで一キロ切ったところで左足に力を入れた途端、脹ら脛が痙攣した。これはまずいと思って力を抜きながら、後は流した。ゴールした後は、今度は右足の甲から臍にかけて、表と裏の筋肉が同時に痙攣してしまった。こんな痙攣は今まで経験したことがない。無意識のうちに、左の膝と大腿部をかばっていたのだろうか。五〇分を切れなかったのは残念だが、今の体調ではこれが目一杯。目標がクリアできたから、満足しなければならぬ。

今回のレースでは、公式の順位と記録は男女一〇位まで。男女含めて四千名近い出場者の中で、一五〇〜二〇〇位前後でゴールしたと思う。スタート地点で僕の前にいた人数、

途中で追い抜き、追い抜かれた数などを概算すればこうなる。一キロ平均四分ちようどのペースで一キロを走ると四八分。このタイムは女子の九位にあたる。僕の記録は一キロ平均四分一〇秒強。来年は女子の一〇位以内を目標にするのが、ちょうど良いようだ。

ハーフ・マラソンまでの長距離レースで国際的に活躍しているハンガリー女子長距離界のホープ、カローヴィッチ・アニコーは、二位以下を大きく離して三九分一二秒で優勝。男子の優勝タイムが三七分一秒。こういう第一線の選手とどれだけのタイム差になるかも、自分の現在の力を図る目安になる。

目指すはハーフ九〇分

次の目標は九月五日の国際ハーフ・マラソン大会（兼ハンガリー・ハーフ・マラソン選手権大会）。参加することに意義があるのではなく、

九〇分以内で走りきることが目標。この記録でようやく年齢別グループで五位以内に入れる。今回の一二キロ走のペースを二キロまで持続すれば、それが達成される。そのため必要なトレーニングも分かっている。問題は満身創痍の体。継続的にトレーニングができれば目標達成に問題ないが、トレーニングを中断されると、今年の達成は難しい。

とにかく、残された時間でハーフ・マラソン九〇分の体を作り上げていく。それがトレーニング目標になる。スピードでは中学時代の自分には勝てないが、耐久力では凌いでいるだろう。向山君と走った記憶や中学時代の記録が、いつまでも体の物差しになっている。しかし、いつまでこの自分の記録と競争できるのか、加齢との競争でもある。

ハンガリーの家には、あの四年前の、痛恨の一二キロ走の優勝カップが保存されている。

編集後記

「ドナウ通信」が発刊されて、一五年になった。発刊当時の様子は、「創刊十周年記念号」に詳しく書いたのですが、ここでは繰り返さない。ちょうどこの時、私は専門調査員として日本大使館に勤務していた。現在、大使館に在勤中の阿部書記官が語学研修を終えて、大使館勤務に就いて間もない頃であった。大使館側で発刊に尽力された渡辺伸公使は、その後、アルジェリア大使を歴任されたが、脾臓ガンで亡くなられた。ご冥福をお祈りしたい。

これまで発刊された「ドナウ通信」は、すべて PDF ファイル化されて、日本人会事務局に保管されている。日本人会のホームページが完成すれば、そこにアップロードされるが、現在でも、私のホームページでダウンロードして読めるようになっていた。
(<http://morita.tateyama.hu>)。

私が編集作業を引き継いだのは一五号からで、それから十一年になる。

集まった原稿にはすべて目を通す。

形式上の統一を図るためにフォーマットを変更し、句読点の打ち方、段落の取り方をチェックして、最低限必要な修正を行う。内容にかかわる修正は、返送して執筆者に修正案を提示する。

印刷の関係で、四頁単位でまとめる必要があり、原稿がすべて出そろった段階で、割付の仕事をおこなう。頁数を調整するために、自分の原稿を延ばしたり、縮めたりして頁数を整える。これができた段階で、余白のイラスト挿入をカプ恵子さんに依頼し、最終原稿を印刷して、酒井由美子さんに渡す。これが一連の作業手順である。

世の中にワープロという便利なものが出た瞬間から、私はこれを利用している。一九八三年に大学の資料室に二百万円もする UNIVAC のワープロ専用機が設置された。これを使って、何冊も翻訳の仕事をした。その後、PC 上にワープロソフトを載せるのが効率的になって、NEC の PC-9800 シ

リーズに「一太郎」を載せて使っていた。マイクロソフトの日本語ワープロ Word が使い物になるのは、Windows 95 以降の話で、かなり最近のことである。二〇年以上のワープロ歴と職業柄、文章を読んだり書いたりするスピードは、ふつうの人の数倍速いと思う。そうでなければ、この種の編集作業はできない。編集用のために、一太郎、Word、Adobe Acrobat の最新バージョンを手許に持っている。

他国で出版されている日本語情報誌はほとんどがミニコミ誌で、生活関連情報で占められている。これにたいして、当地で出版されている日本語情報誌にはそれぞれ特徴があり、ハンガリーに生活し、仕事をしている日本人が、人生や仕事を語り合う場として独特な位置を占めている。編集者の見識と執筆者の協力が、情報誌の質を決める。今後とも、「ドナウ通信」の発展・継続のため、多くの人々の協力を得ていきたい(盛田)。

